

お と べ <sup>2</sup>  
乙部Ⅱ遺跡

－ 田老地区防災集団移転促進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

2017.3

岩手県宮古市教育委員会





お と べ 2  
乙部Ⅱ遺跡

－ 田老地区防災集団移転促進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

2017.3

岩手県宮古市教育委員会





名古屋市博物館写真技師 杉浦秀昭氏撮影

巻頭写真 2号竪穴住居跡出土土師器



## 序

本州最東端に位置する岩手県宮古市には現在のところ 680 か所の遺跡が確認されています。私たちは先人が残した遺跡を保護することが市民へ課せられた責務であると考えております。

一方で住宅や道路を始めとする土地開発は現代において快適な生活を送るためには不可欠な行為であります。その中で遺跡における開発行為については協議、調整を重ねることにより遺跡の保存と土地開発が調和できるよう努めておりますが、やむを得ず失われる遺跡については記録保存を目的とする発掘調査を行っているところであります。

本書は宮古市が事業主体者とする田老地区防災集団移転促進事業に伴い実施された発掘調査の報告になります。東日本大震災大津波により造成されることになった田老地区の集団移転地において今から 1,200 年以上前に遡る 8 世紀の竪穴住居跡が検出され、当該期の貴重な資料を得ることが出来ました。

本書が広く活用され、考古学や地域の歴史研究に寄与し、埋蔵文化財に対する関心が高まる事を切に希望いたします。

最後となりましたが、今回の発掘調査と報告書作成に御協力賜りました関係機関の皆様衷心より感謝申し上げます。



平成 29 年 3 月

宮古市教育委員会  
教育長 伊藤 晃 二





## 例 言

1. 本書は宮古市田老地区に所在した乙部Ⅱ遺跡についての発掘調査報告書である。
2. この調査は、宮古市を事業主体とする田老地区防災集団移転促進事業に伴う記録保存を目的とした緊急事前調査として実施されたものである。
3. 調査主体は宮古市教育委員会である。発掘調査と本書の執筆・編集は江口が担当し、文化課担当職員がこれを補佐した。
4. 調査座標は公共座標 X 系を基準としたものである。座標値は  $X = -98,000$  m、 $Y = 28,000$  m を原点とした。また、図版中は調査用の局地的な座標であることを明示するために R を冠した。レベル数値は標高値である。
5. 土層観察及び文中の色調表記にあたっては『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄 編著 1990 年度版）を使用した。
6. 図版中の記号・略号の表記およびスクリーントーンの表示は以下のとおりである。  
P…土器      S…石       …焼土       …繊維混入の縄文土器
7. 自然科学分析については、炭化材の年代測定は株式会社加速器分析研究所に、樹種同定は古代の森研究舎にそれぞれ委託した。
8. 遺物の観察は全て肉眼観察によるものである。
9. 本書に収録した調査記録及び出土資料は、宮古市教育委員会で保管している。

## 目 次

1 調査経過	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査概要	1
(3) 調査体制	1
(4) 宮古市の位置と環境	2
(5) 乙部Ⅱ遺跡と周辺の遺跡	4
2 調査内容	7
(1) 基本土層	7
(2) 遺構と遺物	7
(3) 自然科学分析	19
(4) 調査のまとめ	27
参考文献	
写真図版	29
報告書抄録	37

## 図版目次

第1図	乙部Ⅱ遺跡位置図	2
第2図	遺跡周辺地形図	3
第3図	周辺の遺跡分布図	4
第4図	調査区位置図	5
第5図	調査区全体図	6
第6図	1号竪穴住居跡、1号土坑平面図・断面図	8
第7図	1号竪穴住居跡柱穴・1号土坑断面図	9
第8図	1号竪穴住居跡カマド平面図・断面図	10
第9図	2号竪穴住居跡平面図・断面図	12
第10図	2号竪穴住居跡柱穴断面図	13
第11図	2号竪穴住居跡カマド平面図	14
第12図	2号竪穴住居跡カマド断面図	15
第13図	2号竪穴住居跡微細図	16
第14図	2号竪穴住居跡出土遺物	17
第15図	遺構外出土土器	18

## 写真図版目次

写真1	調査区近景1	31	写真12	2号竪穴住居跡支脚検出状況	33
写真2	調査区近景2	31	写真13	2号竪穴住居跡出土土師器(1)	34
写真3	1号竪穴住居跡完掘状況	32	写真14	2号竪穴住居跡出土土師器(2)	34
写真4	1号竪穴住居跡検出状況	32	写真15	2号竪穴住居跡出土土師器(3)	34
写真5	1号竪穴住居跡カマド完掘状況	32	写真16	2号竪穴住居跡出土紡錘車	34
写真6	1号土坑セクション	32	写真17	2号竪穴住居跡出土円形礫	34
写真7	1号土坑完掘状況	32	写真18	2号竪穴住居跡出土炭化材(1)	34
写真8	2号竪穴住居跡完掘状況	33	写真19	2号竪穴住居跡出土炭化材(2)	34
写真9	2号竪穴住居跡検出状況	33	写真20	2号竪穴住居跡出土炭化材(3)	34
写真10	2号竪穴住居跡セクション	33	写真21	2号竪穴住居跡出土遺物	35
写真11	2号竪穴住居跡カマド完掘状況	33	写真22	遺構外出土遺物	36

# 1 調査経過

## (1) 調査に至る経過

乙部Ⅱ遺跡発掘調査は宮古市田老地区青砂里において実施された田老地区防災集団移転促進事業に伴う緊急の発掘調査である。宮古市教育委員会（以下、市教委）は平成24年11月、東日本大震災大津波により高台移転当該事業の移転地である当該地の現地踏査を行い、新規の埋蔵文化財包蔵地となる可能性があることを開発主体者である宮古市都市整備部都市計画課に伝えた。双方の協議の結果、試掘調査を実施することとなり、翌平成25年5月に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、竪穴住居跡を検出したことから埋蔵文化財の保護措置についての協議を都市計画課と行ったが、移転地に変更がないことから発掘調査を実施する必要となり、7月4日から発掘調査の着手に至ったものである。

なお、市教委は平成25年7月24日付けで文化財保護法第99条第1項の規定により当埋蔵文化財発掘調査の実施を報告している。

## (2) 調査概要

発掘調査地点	宮古市田老青砂里地内
調査原因	田老地区防災集団移転促進事業
発掘調査面積	154㎡（開発面積 254,489.41㎡）
発掘調査期間	平成25年7月4日～8月23日
資料整理期間	平成25年8月26日～平成25年8月30日 平成28年4月7日～平成29年3月31日

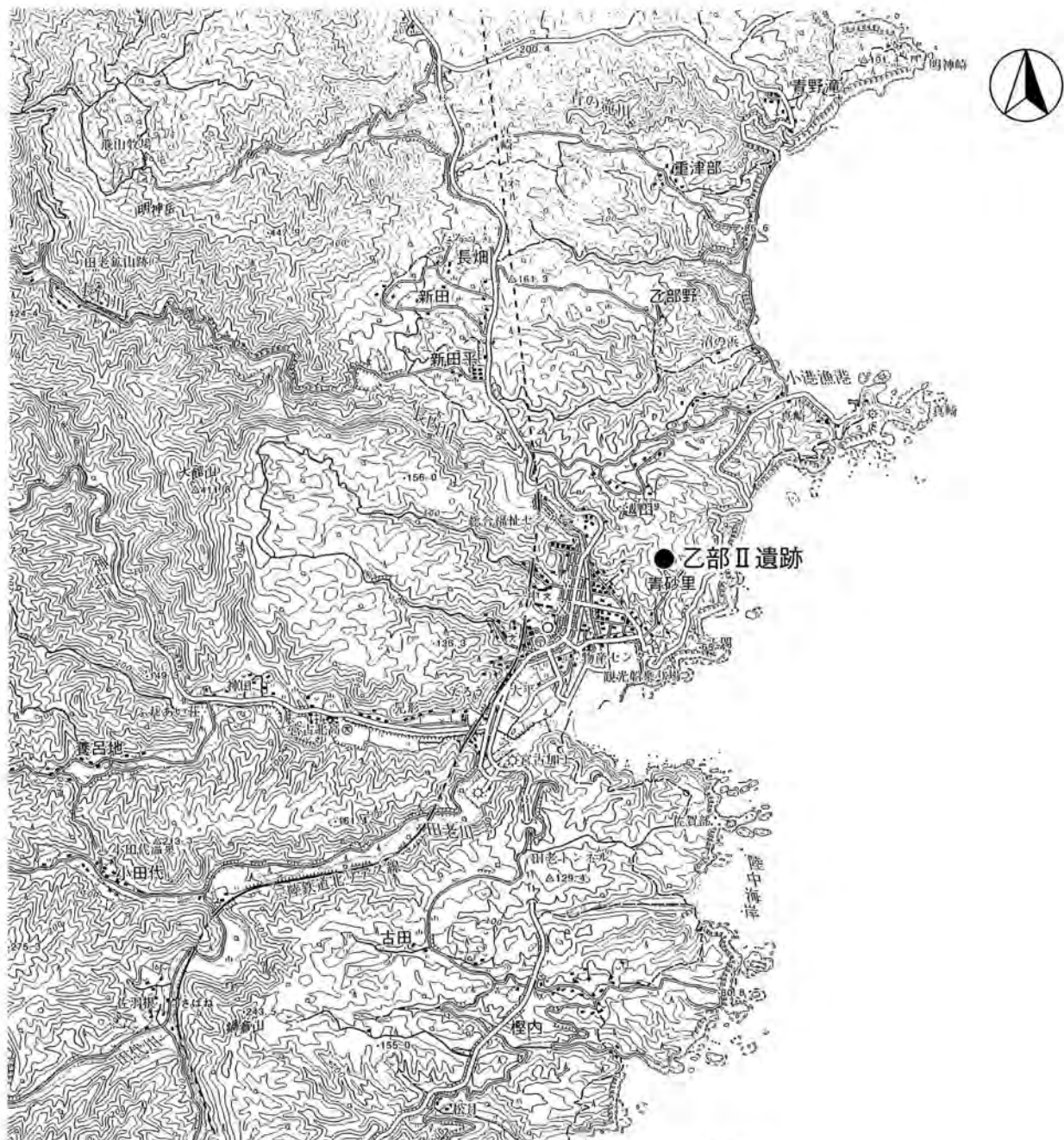
## (3) 調査体制

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	伊藤 晃二
調査統括	高橋憲太郎	宮古市教育委員会	文化課長
事務担当	鎌田祐二	〃	文化課担当長（平成27年度） 文化課埋蔵文化財センター所長（平成28年度）
調査員	布谷義彦	〃	文化課主任文化財調査員（平成27年度）
	伊藤正人	〃	文化課主任文化財調査員（平成28年度）
	安原 誠	〃	文化課主任文化財調査員
	長谷川真	〃	文化課主任文化財調査員（平成27年度）
	江口邦泰	〃	文化課主任文化財調査員
	千葉剛史	〃	文化課文化財調査員（平成27年度）
	阿部 豊	〃	文化課埋蔵文化財発掘調査員
	前川友宏	〃	文化課埋蔵文化財調査員
	赤沼みちる	〃	文化課埋蔵文化財調査員
発掘調査作業員	大下義文 木村洋一 加藤有次 佐々木勉 澤田榮夫 鈴木正広 鳥居義文 三浦 功 三上武一 三河義郎 山根保行 山屋秋英		
資料整理作業員	大程保見 菅野真実 佐々木ゆかり		

#### (4) 宮古市の位置と環境 (第1図、第2図)

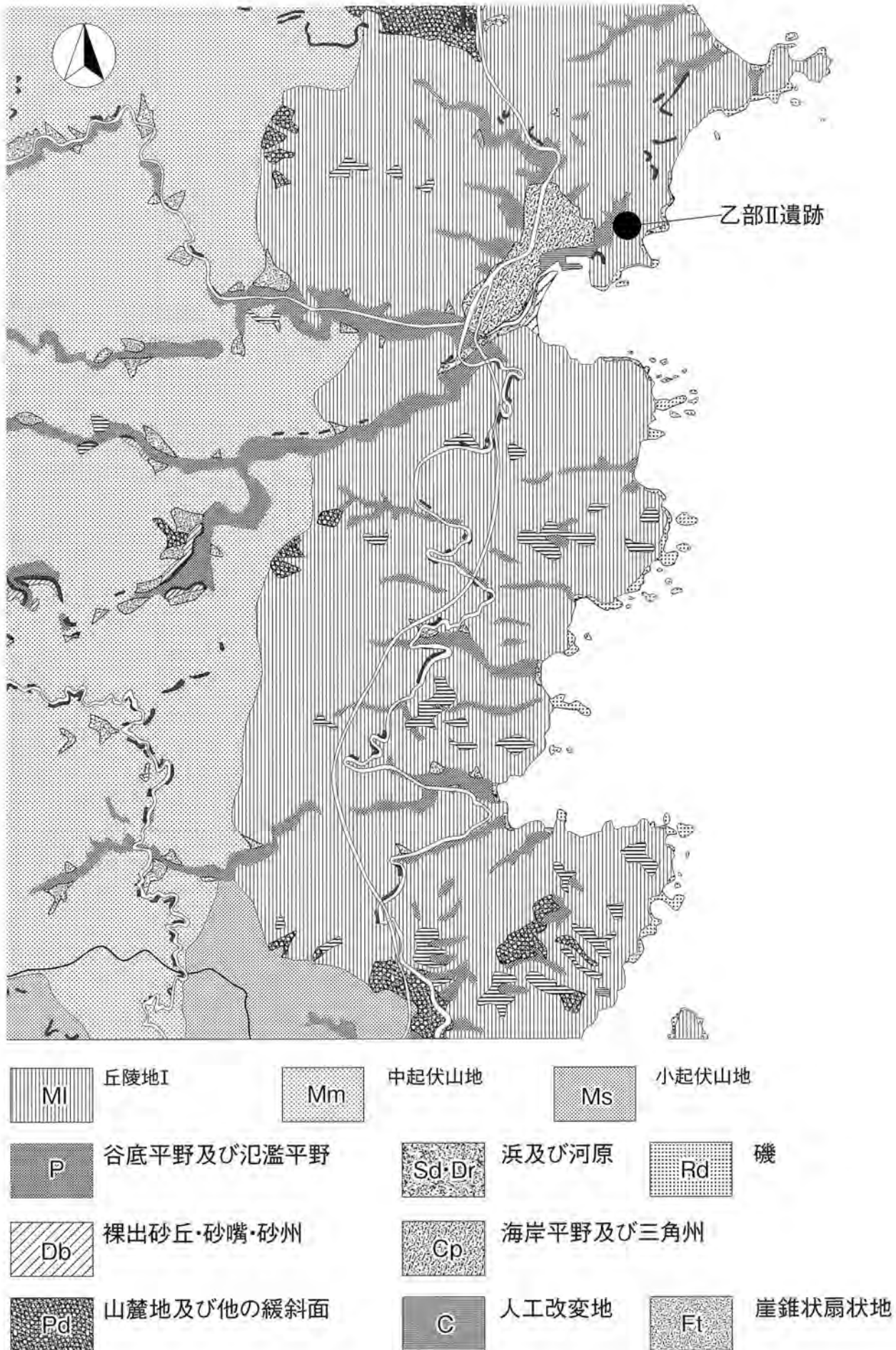
岩手県宮古市は三陸沿岸中部に位置し、北は岩泉町、西は盛岡市に隣接している。市の東端部に位置する鮎ヶ崎は本州最東端として知られている。平成17年には旧宮古市、旧田老町、旧新里村が合併し、平成22年には旧川井村が編入している。平成23年3月には東日本大震災大津波で甚大な被害を受け、現在は復興事業がすすめられている。

宮古市の沿岸部は隆起海岸が続き、海食により形成された自然景観は観光地として優れ、浄土ヶ浜は国の名勝に、三王岩は県の天然記念物に指定されている。市内を流れる河川は市の中央部を流れる閉伊川、宮古湾最奥部へ流れる津軽石川などがあり、河川流域の樹枝状に開析された丘陵地には数多くの遺跡が立地している。市内の地形は山地と丘陵地で占められている。山地は川井地区では標高1,000 m級の大起伏山地が広がっているものの、山地帯の多くは重茂半島にある月山(455 m)や十二神山(731 m)を代表する小起伏山地からなる。丘陵地は閉伊川流域の千徳丘



第1図 乙部II遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)





第2図 遺跡周辺地形図 (S = 1 : 50,000)

陵や八木沢丘陵、津軽石川流域の豊間根丘陵、隆起海岸により形成され小河川が流れて開析された小本丘陵などがある。小本丘陵は市の北部に位置し、国の史跡である崎山貝塚を代表とする大中規模の遺跡が多数所在している。

(5) 乙部Ⅱ遺跡と周辺の遺跡 (第3図)

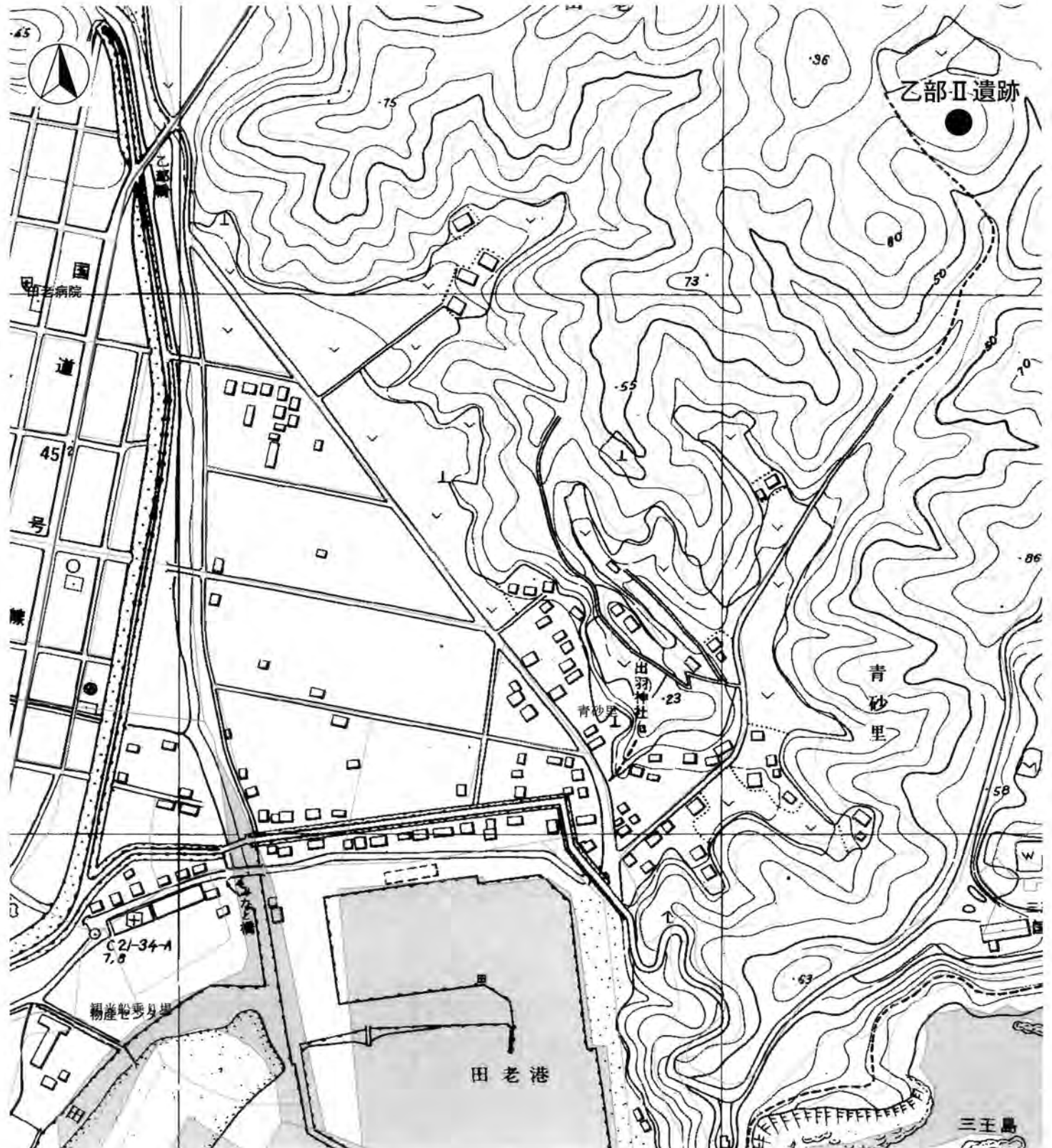
乙部Ⅱ遺跡は宮古市田老地区に所在し、平成25年の試掘調査により新規に発見された小本丘陵上に位置する遺跡である。現在は田老地区防災集団移転促進事業により遺跡の全てを消失しているが、隣接する尾根等には同様の遺跡が残っている可能性がある。乙部Ⅱ遺跡周辺では越田松長根Ⅰ遺跡がある。平成25年には宮古市教育委員会が被災した個人の住宅再建に伴う自己住宅建築で2か所を、平成27年度には宮古市教育委員会と(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財セン



第3図 周辺の遺跡分布図 (S= 1 : 25,000)

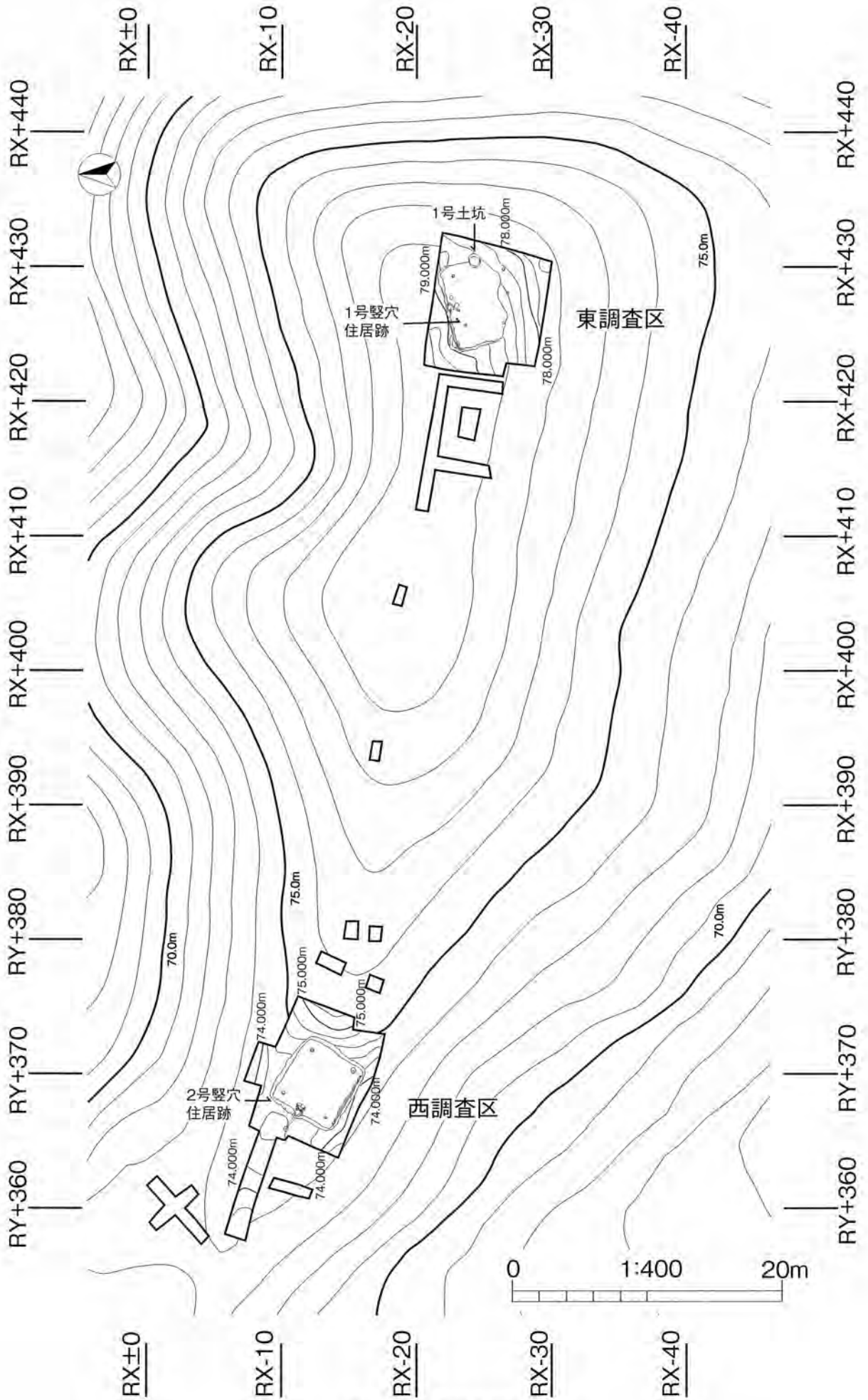
ターが田老地区防災集団移転促進事業地内から国道45号を繋ぐ市道の整備事業に伴う発掘調査を各々実施している。3次にわたる発掘調査により越田松長根I遺跡が縄文時代と平安時代の集落跡であることが確認されている。

越田松長根I遺跡の周辺になると、現在のところ遺跡は疎らに分布している。乙部II遺跡から北西約1.5kmに位置する駿達I遺跡では、近世と考えられる炭窯が1基確認されている。



第4図 調査区位置図 (S= 1 : 2,500)





第5図 調査区全体図



## 2 調査内容

### (1) 基本土層 (第4図、第5図)

調査地区は田老港から北東へ約1kmに位置し、標高約74m～79mの尾根上にある。調査区は2ヶ所に分かれ、各々を東調査区と西調査区と呼称する。基本土層は以下の通りである。

#### 東調査区

I層 黒褐色土層で表土層にあたる。層厚は30cm～50cmである。

II層 暗褐色土層で層厚は10cm前後である。弥生後期の土器片が出土している。竪穴住居跡はII層を掘り込んでいる。

#### 西調査区

I層 暗褐色土層で表土層にあたる。層厚は10～20cmである。

II層 にぶい黄褐色土で層厚は10cm前後である。

III層 黒褐色土層で層厚は10cm前後である。

### (2) 遺構と遺物

東調査区で検出された遺構は竪穴住居跡1棟、土坑1基である。西調査区で検出された遺構は竪穴住居跡1棟である。東調査区で検出された竪穴住居跡を1号竪穴住居跡、西調査区で検出された竪穴住居跡を2号竪穴住居跡と呼称する。

#### 1号竪穴住居跡 (第6～8図 写真3～5)

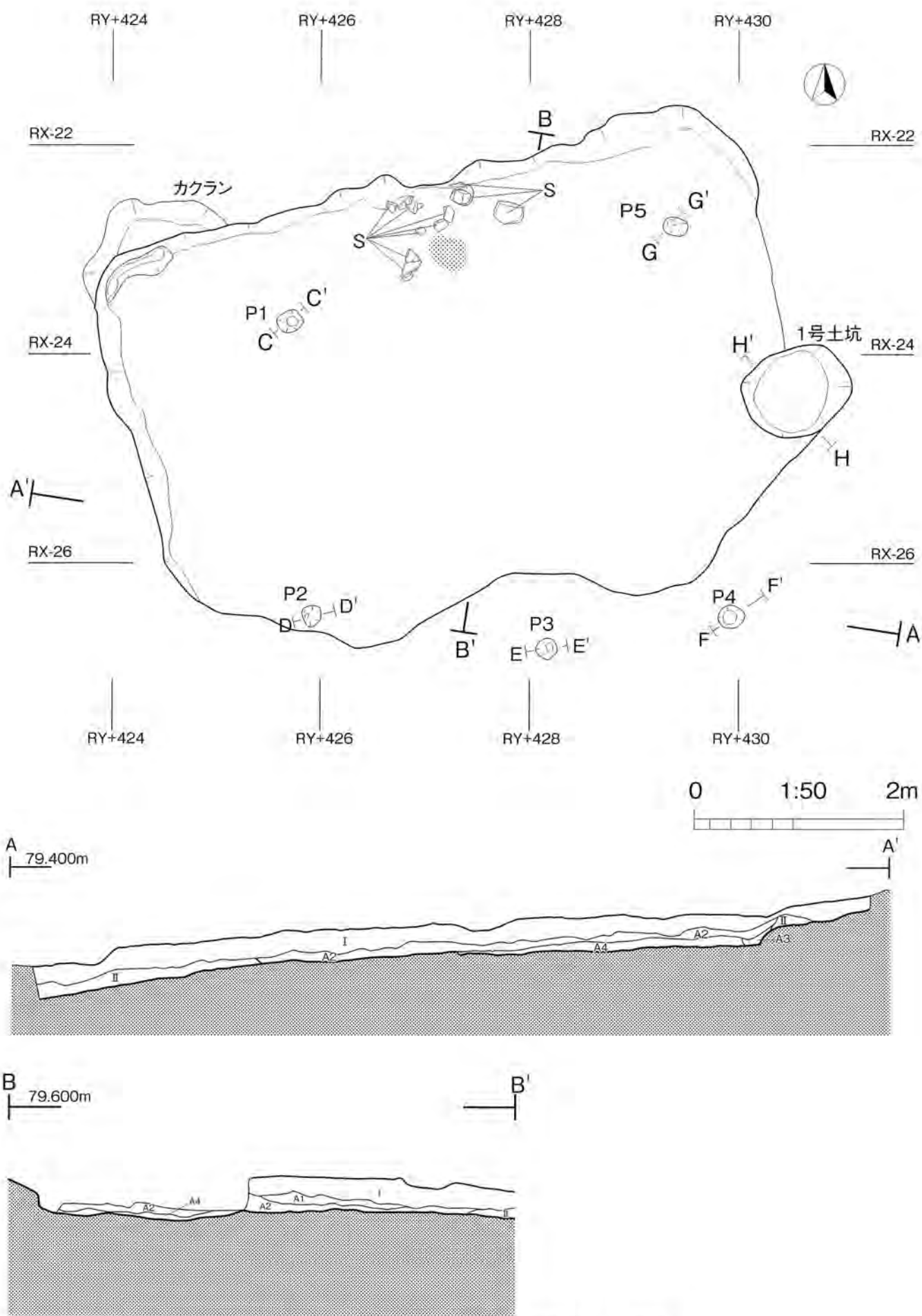
**概要** 東調査区のほぼ中央で検出された。平面形は長方形で北壁と西壁は残存しているが、他は立ち上がりが確認されず、平坦な床面のみ確認された。残存部分における最大長は6m30cm、それに直交する北壁から南部の床面残存部までの最大幅は4m20cmを測る。北壁の中央には散在する被熱した礫15点と焼土が確認された。床の北西隅には周溝が確認された。

**付帯施設** 北壁中央にある被熱した礫と焼土はカマドと考えられるが、煙出しを構成する煙道と煙出しのピットは確認されなかった。このため、竪穴住居として呼称してあるが、別の用途として構築された可能性がある。礫はすべて花崗岩である。焼土範囲は不整形を呈し、最大径は41cm、それに直交する径は30cmを測る。

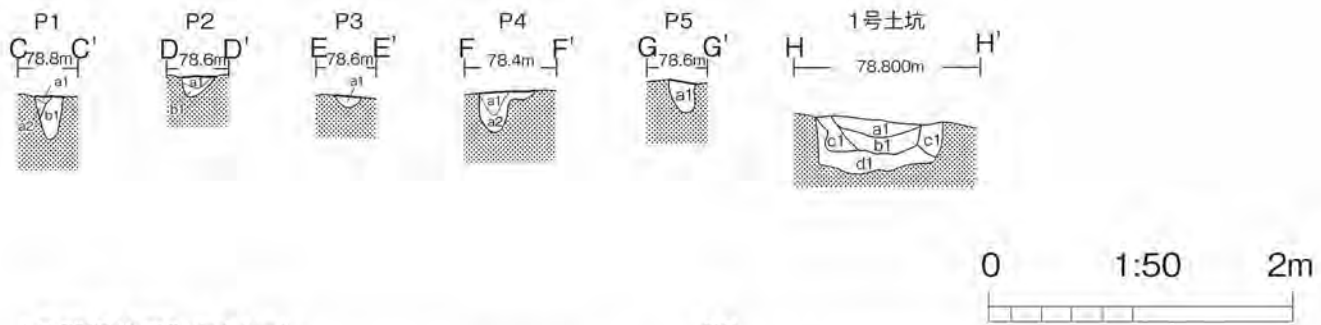
柱穴を構成していたと考えられる小ピットはP1～P5の5基確認された。すべて最大径と深さが10～20cmの範疇に収まる。北西隅に確認された周溝は長さが30cmと短く、掘り込みも浅い。

**埋土** 1層～4層に大別される。A1層は黒色土を基本土とし、にぶい黄褐色土を混入土とする。A2層は遺構内の全体を覆う土層で、黒色土を基本土とする。A3層は壁際に堆積している土層で、黒褐色土を基本土とし、地山土である明黄褐色土を混入土とする。A4層は床面直上層で、暗褐色土を基本土とし、地山土である明黄褐色土を混入土とする。どの層も粘質が弱い。ピット内は1～3層に大別される。P1はa1、a2層がにぶい黄褐色土を基本土とし、b1層が灰黄褐色土を基本土とする。P2はa1層が褐色土を基本土とし、b1層がにぶい黄褐色土を基本土とする。P3は単層で、黒色土を基本土とする。P4はa1層が暗褐色土を基本土とし、b1層が黄褐色土を基本土とする。P5は単層で、褐色土を基本土とする。

カマド内は6層に大別される。a1層は暗褐色土を基本土とし、地山土である明黄褐色土を混入土とする。b1層は礫周辺に堆積した土層で、明赤褐色土を基本土とし、黒褐色土を混入土とする。c1層は壁際層でにぶい黄褐色土を基本土とし、黒褐色土を混入土とする。c2層は黒褐色土を基



第6図 1号竪穴住居跡、1号土坑平面図・断面図



1号竪穴住居跡セクション

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
I	10YR2/3 scl	10YR2/2 scl 径1cm塊状1%	粘性なし・疎・カーボン1%
II	10YR3/3 scl	10YR6/6 scl 径3mm塊状5%	粘性なし・疎
A1	10YR2/2 sici	10YR4/3 scl 径1cm塊状3%	粘性なし・疎・カーボン1%
A2	10YR2/2 sici		粘性なし・密・カーボン3%
A3	10YR3/2 scl	10YR6/6 scl 径5mm粒状3%	粘性なし・やや疎・カーボン1%
A4	10YR3/3 scl	10YR6/6 scl 径1cm粒状10%	粘性なし・やや密

P3

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	1号竪穴住居跡 1層と同じ		

P4

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	10YR3/3 scl	10YR6/6 scl 径2mm粒状5%	粘性なし・やや疎・カーボン1%
a2	10YR4/4 scl	10YR6/6 scl 径2mm粒状5%	粘性なし・やや疎

P5

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	10YR4/6 scl	10YR4/6 scl 径3mm塊状1%	粘性なし・疎

P1

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	10YR4/3 scl	10YR6/4 scl 径5mm粒状	粘性なし・密・カーボン1%
a2	10YR5/4 scl		粘性なし・密
b1	10YR5/2 scl	10YR6/4 scl 径3mm粒状2%	粘性なし・やや密

P2

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	10YR4/6 scl	10YR6/6 scl 径3mm粒状3%	粘性なし・疎
b1	10YR4/3 scl	10YR6/6 scl 径3mm粒状1%	粘性なし・疎

1号土坑

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	10YR2/1 sici	10YR6/6 scl 径3mm粒状1%	粘性なし・疎・カーボン1%
b1	10YR4/2 sici	10YR6/6 scl 径1cm粒状3%	粘性なし・やや密・カーボン1% 焼土塊1%
c1	10YR5/3 sici	10YR6/6 scl 径1cm粒状3%	粘性なし・やや密・カーボン1%
d1	10YR3/3 sici	10YR6/6 scl 径5mm粒状1%	粘性なし・やや密・カーボン1% 焼土塊1%

第7図 1号竪穴住居跡柱穴・1号土坑断面図

本土とし、にぶい黄橙色土を混入土とする。d1層とd2層は中央部の掘り方に堆積している土層で、カマドの火床と思われるが、焼土は表面のみである。d1層は黒色土を基本土とし、地山土である明黄褐色土を混入土とする。d2層は黒褐色土を基本土とし、地山土である明黄褐色土を混入土とする。

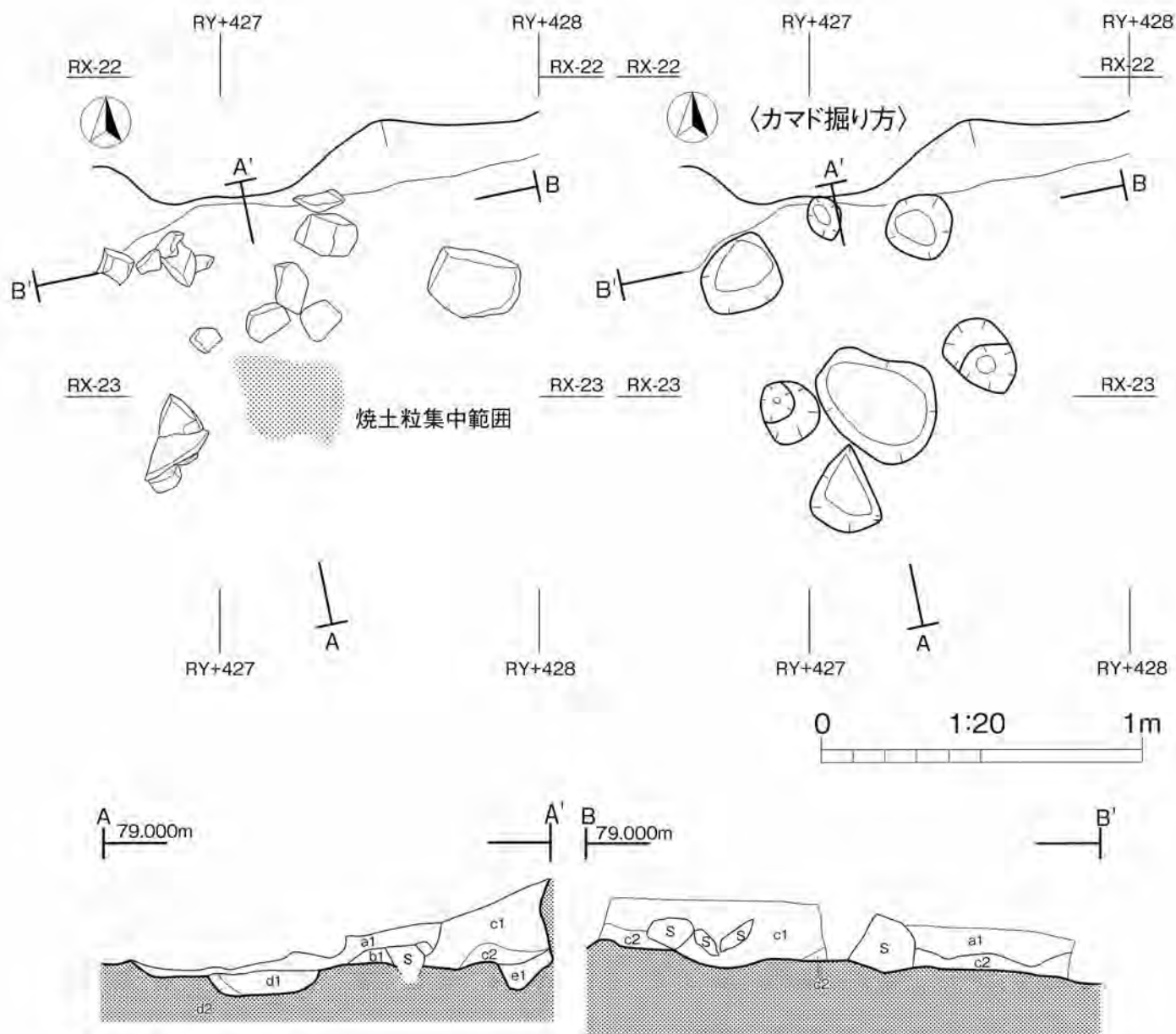
**時期** 時期を特定できる遺物は出土しなかったため、時期は不明であるが、遺構の特徴から古代と考えられる。

1号土坑（第6図、第7図、写真図版6、7）

**概要** 調査区東部、1号竪穴住居跡の南東隅で検出された。1号竪穴住居跡との新旧関係は不明で、1号竪穴住居跡に付帯する可能性もある。平面形は楕円形、断面形は長方形で、規模は長軸が1m、短軸が87cm、深さ37cmを測る。

**埋土** 4層に分層された。a1層は黒色土を基本土とする。b1層は灰黄褐色土を基本土とする。c1層は壁際層で、にぶい黄褐色土を基本土とする。d1層は暗褐色土を基本土とする。すべての土層でカーボンと地山土である明黄褐色土が混入し、いずれも粘質が弱い。また、b1層とd1層は焼土粒が混入している。

**時期** 時期を特定できる遺物は出土しなかったため、時期は不明である。



1号竪穴住居跡カマドセクション

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	10YR3/4 scl	10YR6/6 scl 径3mm粒状3%	粘性なし・炭・カーボン1%
b1	5YR5/6 scl	10YR3/2 scl 径5mm粒状1%	粘性なし・やや疎・カーボン2%
c1	10YR5/4 scl	10YR3/2 scl 径2mm塊状5%	粘性なし・密・カーボン1%
c2	10YR3/1 scl	10YR6/4 scl 径5mm粒状3%	粘性なし・やや疎・カーボン2%

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
d1	10YR2/2 sicl	10YR6/6 sil 径5mm粒状3%	粘性なし・密・カーボン2%
d2	10YR2/3 sicl	10YR6/6 sil 径3mm粒状7%	粘性なし・やや疎
e1	10YR4/4 scl	10YR6/6 scl 径5mm粒状2%	粘性なし・密

第8図 1号竪穴住居跡カマド平面図・断面図

## 2号竪穴住居跡 (第9～14図 写真8～21)

**概要** 西調査区の中央で検出された。平面形は四隅のコーナーが緩やかな方形で、上端は北東が5.5m、南東が4.7m、南西が5m、北西が5mを測る。床面は平坦で、北東が5m、南東が4.6m、南西が4.9m、北西が4.9mを測る。最大の深さは95cmを測る。壁は良好に残され、下端から上端へ急に立ち上がる。床面の四隅には柱穴が確認され、南西側には1条の周溝が確認された。埋土中からは炭化材が北西部、東部、南部を中心に出土し、焼失住居の様相である。



**付帯施設** 西壁中央に袖と天井を礫で組み上げられたカマドが確認された。カマドは煙出しを構成する煙道と煙出しのピットをもつ割り貫き式で、煙道の長さは1 m 34cmを測り、焼土面から煙出しのピットまでは2 mを測る。煙出しピットの平面形は不整円形で、最大径は36cm、ピットの上端から煙道の下部までは62cmを測る。袖と天井の礫は平らな花崗岩で、天井は後世の根が入り込んだことにより南東へ動いている。焼土範囲は不整円形を呈し、最大径は45cmを測る。焼土範囲の西端には土師器の底部を転用したものと平らの礫からなる支脚が確認された。

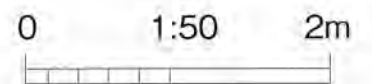
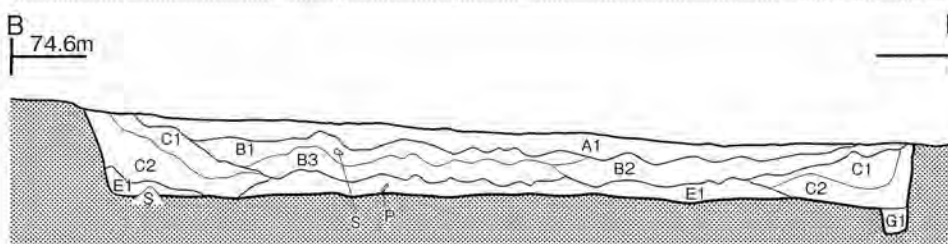
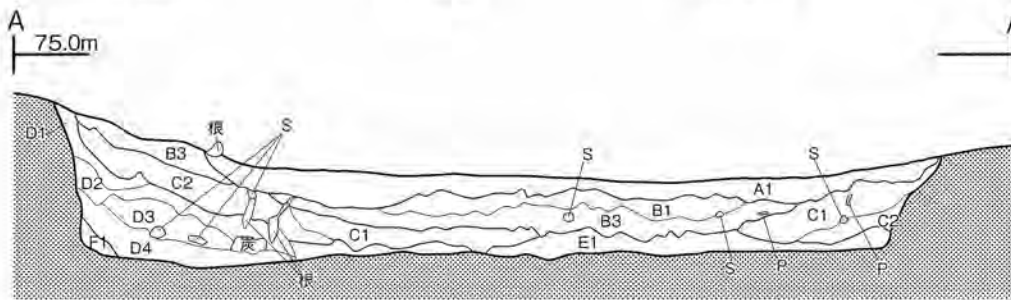
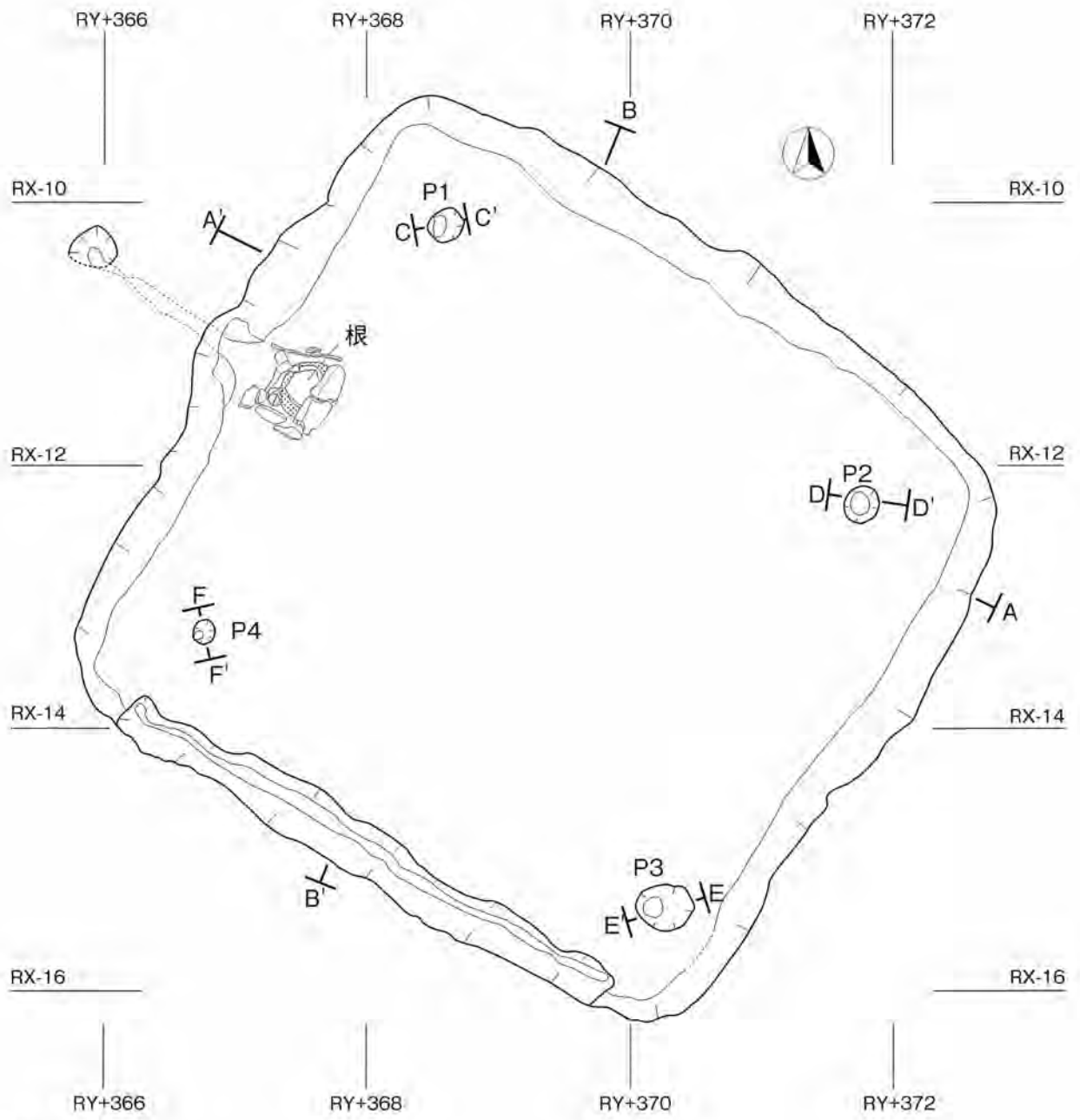
柱穴を構成していたと考えられるピットはP 1～P 4の4基である。最大径は15～40cmを測り、深さは35～45cmを測る。周溝は断面が台形で、深さは15～20cmを測る。

**埋土** 7層に大別され、自然堆積である。A 1層は竪穴住居の壁際を除くほぼ全体を覆う土層で、黒褐色土を基本土とし、にぶい黄褐色土を混入土とする。B層はB 1層～B 3層に分層され、黒色土を基本土とし、にぶい黄褐色土を混入土とする。C層とD層は壁際に堆積している土層である。上位のC層はC 1層とC 2層に分層され、褐色土またはにぶい黄褐色土を基本土とする。D層はD 1層～D 4層に分層され、褐色土と暗褐色土を基本土とする。E 1層は床面直上層で、灰黄褐色土を基本土とし、褐色土を混入土とする。F 1層は壁の崩落土層である。G 1層は周溝内の土層で、褐色土を基本土とし、黒褐色土を混入土とする。ピット内は3～4層に大別される。P1はa 1層が黒褐色土を基本土とし、b 1層とb 2層が黄褐色土を基本土とする。P2はa 1層とb 1層がにぶい黄褐色土を基本土とし、b 2層とc 1層が黄褐色土を基本土とする。P3はa 1層が暗褐色土を、b 1層はにぶい黄褐色土を、c 1層は黄褐色土を基本土とする。P4はa 1層が黒褐色土を、b 1層がにぶい黄褐色土を、c 1層が灰黄褐色土を基本土とする。

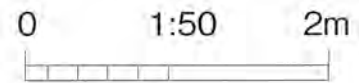
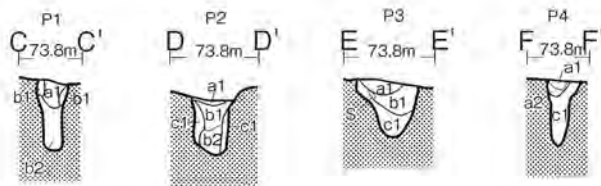
カマド内は6層に大別される。a 1層とa 2層は天井石周辺に堆積した土層で、a 1層は褐色土を基本土とし、地山土である明黄褐色土を混入土とする。a 2層は西側の袖石周辺にのみ見られ、にぶい黄褐色土を基本土とし、褐色土を混入土とする。b 1層とb 2層は火床内部に堆積した土層で、b 1層は赤褐色土を、b 2層は暗褐色土を基本土とする。c 1層は煙出しピット内に堆積した土層で、暗褐色土を基本土とし、地山土である明黄褐色土を混入土とする。d 1層は構築土で、褐色土を混入土とする。

**遺物出土状況** 土師器の長胴甕と紡錘車が南部で、土師器の完形の坏が北西部で、中央部で土師器の甕が1点出土している。これらの遺物は5層から出土している。その他、使用痕が見られない花崗岩質の円形の礫が北部で集中して出土した。また、前述したように炭化材が出土し、特に南部では重なった状態で出土している。炭化材は柱及び棒状のものが多く、南壁付近では板状の炭化材が出土している。なお、炭化材については図に記載した3点において年代測定を行い、材の位置を実測したものについてはほぼ全てにおいて樹種同定を行っている。

**遺物** 第14図1は北西部で出土した完形の土師器の坏である。規模は口径13.9cm、器高5.2cm、底径7.1cmを測る。器形は底部が平底で、口縁部から体部は内湾気味に立ち上がる。外面は段を有し、段より上部はミガキを、段より下部を浅く細かいハケによる調整を施している。内面は炭素を吸着させる内黒であるが、一部未吸着部分が残っている。内面の調整は幅の狭いミガキを体部は横位に、底部は放射状に施している。2は土師器の坏で、埋土の3a層から出土した。1と同じく内黒処理されている。復元された規模は口径15.5cm、器高6.4cm、底径7.1cmを測る。器形は底部が丸底で、口縁部から体部は内湾気味に立ち上がる。外面は段を有し、沈線より上部の口縁部でヨコナデによる調整を施し、体部はハケによる調整を施している。内面の調整は横位のミガキを施している。3は



第9图 2号竖穴住居跡平面图・断面图



2号竪穴住居跡セクション

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	10YR2/3 scl	10YR4/3 scl 径1cm粒状10%	粘性なし・疎・カーボン2%
B1	10YR2/2 scl	10YR4/3 scl 径2cm塊状15%	粘性なし・疎・カーボン1%
B2	10YR3/2 scl	10YR4/3 scl 径2cm塊状20%	粘性なし・疎・カーボン3%
B3	10YR2/1 scl	10YR4/3 scl 径2cm塊状7%	粘性ややなし・やや疎・カーボン5%
C1	10YR4/6 sl	10YR2/3 scl 径5cm塊状1%	粘性なし・密・カーボン5%
C2	10YR3/4 sl	10YR4/6 sl 径3cm塊状3%	粘性なし・密・カーボン3%
D1	10YR4/6 scl	10YR6/6 sl 径5cm塊状3%	粘性なし・疎
D2	10YR3/4 scl	10YR6/6 sl 径2cm塊状7%	粘性なし・やや密
D3	10YR4/4 sl	10YR6/6 sl 径5cm塊状10%	粘性なし・やや密・カーボン2%
D4	10YR6/5 sl	10YR6/6 sl 径2cm塊状10%	粘性なし・密
E1	10YR4/2 sl	10YR4/4 sl 径2cm塊状15%	粘性なし・やや密・カーボン10%
F1	10YR5/6 sl	10YR6/6 sl 径2cm塊状1%	粘性なし・やや疎
G1	10YR4/6 scl	10YR3/1 scl 径1cm粒状5%	粘性なし・やや疎

P2

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	10YR4/3 scl	10YR7/6 scl 径2cm塊状5%	粘性なし・やや密・カーボン2%
b1	10YR5/4 scl	10YR6/6 scl 径1cm塊状7%	粘性なし・やや疎・カーボン1%
b2	10YR5/6 scl	10YR6/6 scl 径2cm塊状5%	粘性なし・やや疎
c1	10YR6/6 scl	10YR7/6 scl 径3mm粒状3%	粘性なし・やや密

P3

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	10YR3/3 scl	10YR6/6 scl 径3cm塊状1%	粘性なし・やや密・カーボン5%
b1	10YR5/4 scl	10YR6/6 scl 径5mm塊状3%	粘性なし・密・カーボン1%
c1	10YR6/6 scl	10YR3/3 scl 径1cm粒状1%	粘性なし・密

P4

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	10YR3/1 scl	10YR6/6 scl 径7mm粒状3%	粘性なし・密
a2	10YR5/4 scl	10YR6/6 scl 径7mm粒状5%	粘性なし・密
c1	10YR4/2 scl	10YR6/6 scl 径3mm粒状2%	粘性なし・密・カーボン1%

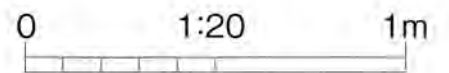
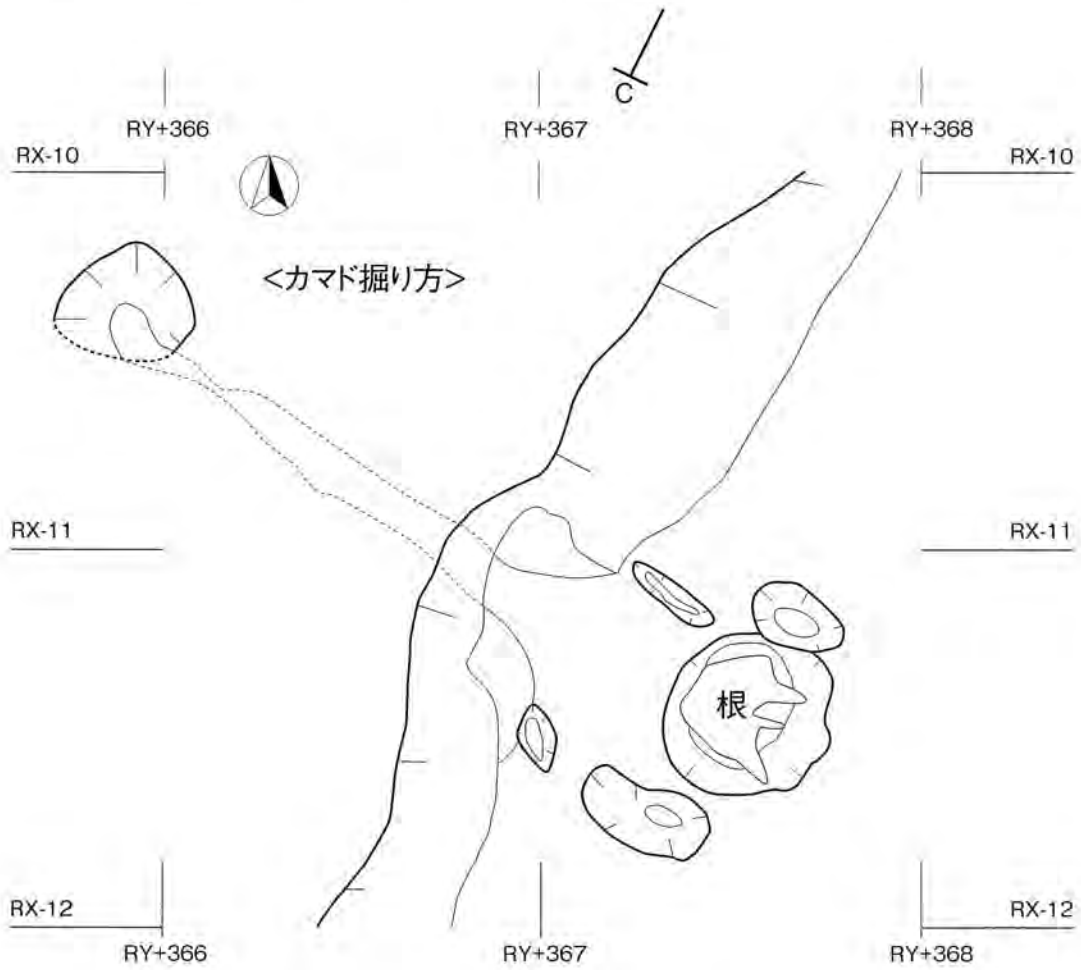
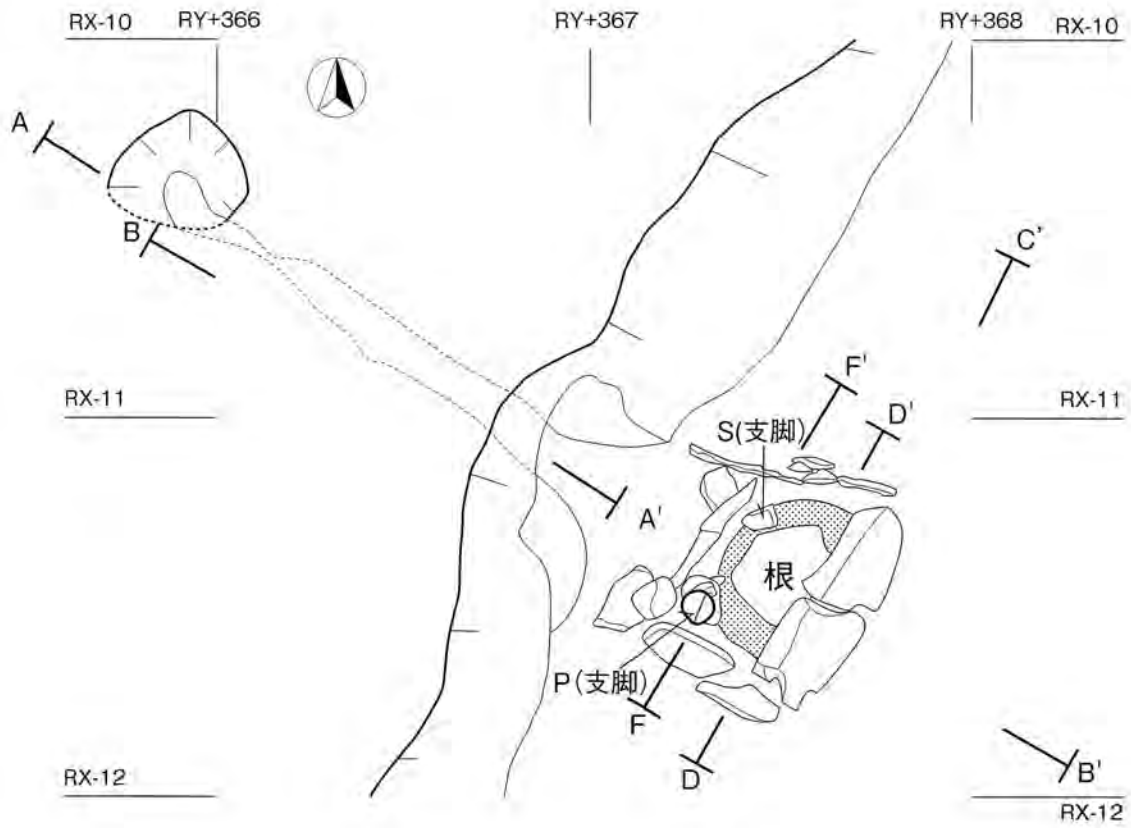
P1

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	10YR3/2 scl	10YR6/6 scl 径2cm粒状2%	粘性なし・密
b1	10YR6/6 scl	10YR3/2 scl 径5mm粒状3%	粘性なし・密
b2	10YR5/6 scl		粘性なし・疎

第 10 図 2号竪穴住居跡柱穴断面図

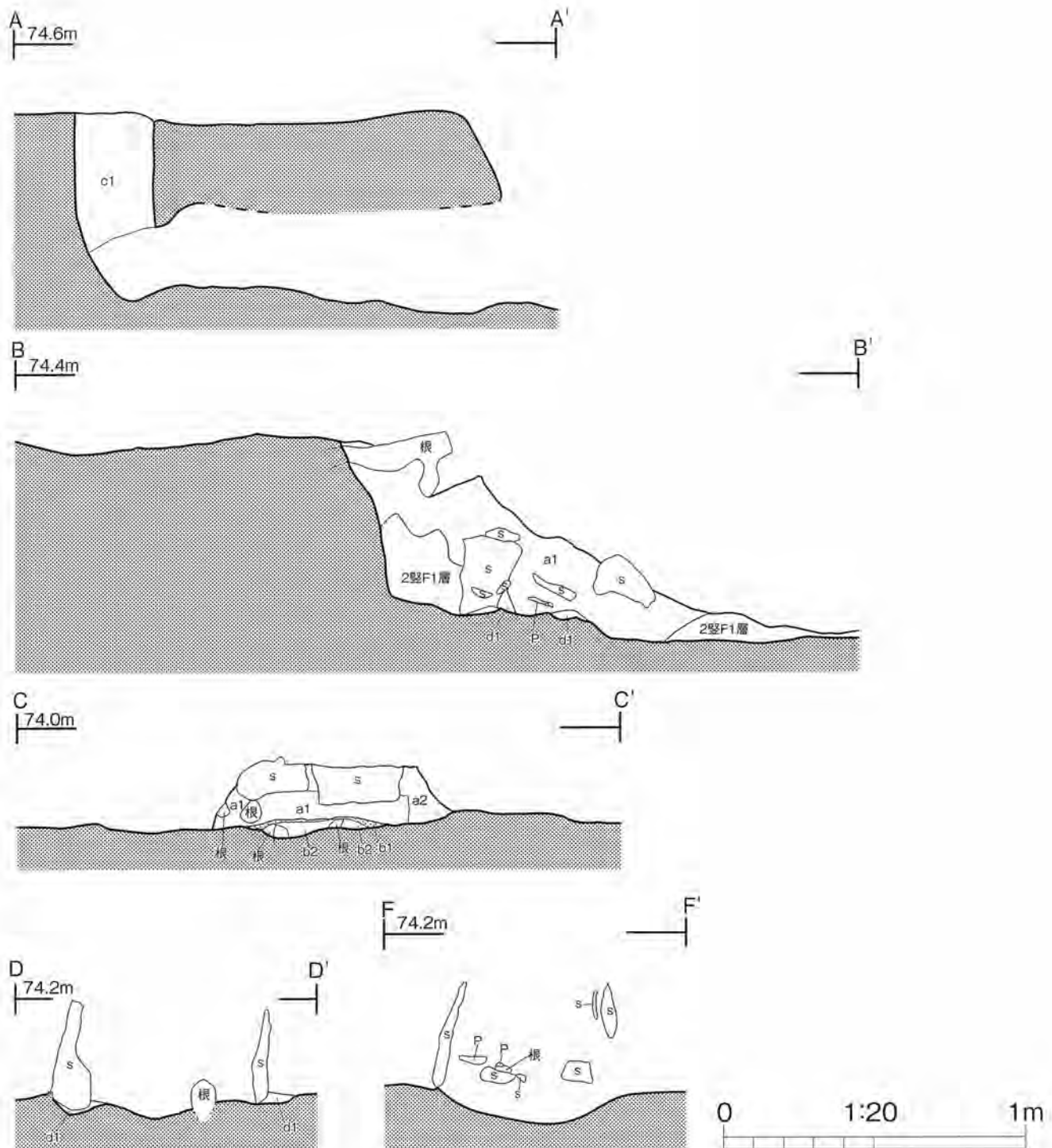
中央部で出土した土師器の甕である。底部は欠けている。規模は口径 15.7cm、器高 18cm、胴部の最大径 13.7cmを測る。器形は体部が膨れ、口縁部は外に開いている。外面は肩の部分に段を有し、沈線より上部の口縁部でヨコナデによる調整を、体部は浅く細かいヘラナデによる調整を施している。内面の調整は口縁部でヨコナデを、体部でハケ調整を施している。4は竪穴住居内の南部で出土した土師器の長胴甕である。3と同様、底部は欠損しているが、口縁部から底部に近い胴部下半まで残存している。規模は口径 17.6cm、器高 38.1cm、胴部の最大径 18.2cmを測る。胴部下半には黒斑が見られる。器形は口縁部が外反し、胴部上半でやや膨れ、下半へ向かって急に窄まる。外面の肩の部分には段を有し、体部は浅く細かいヘラナデによる調整を施している。内面の調整はほぼハケによる調整を施している。5は支脚として転用された底部から体部にかけての土師器である。底径 7.9cmを測る。底部の端は外に張り出し、体部は内湾している。内面はハケによる調整を施している。6は南部で出土した土製の紡錘車である。規模は表面の口径 4.6cm、裏面の口径 5.4cm、厚さ 1.7cm、中心に空けられた貫通孔の孔径 7mmを測る。断面は台形で、色調はにぶい黄橙色を呈する。ヘラ状の工具と思われる整形痕が残されている。

時期 出土遺物の 1～4 から時期は 8 世紀後半、奈良時代の終わりと考えられる。



第 11 図 2号竪穴住居跡カマド平面図

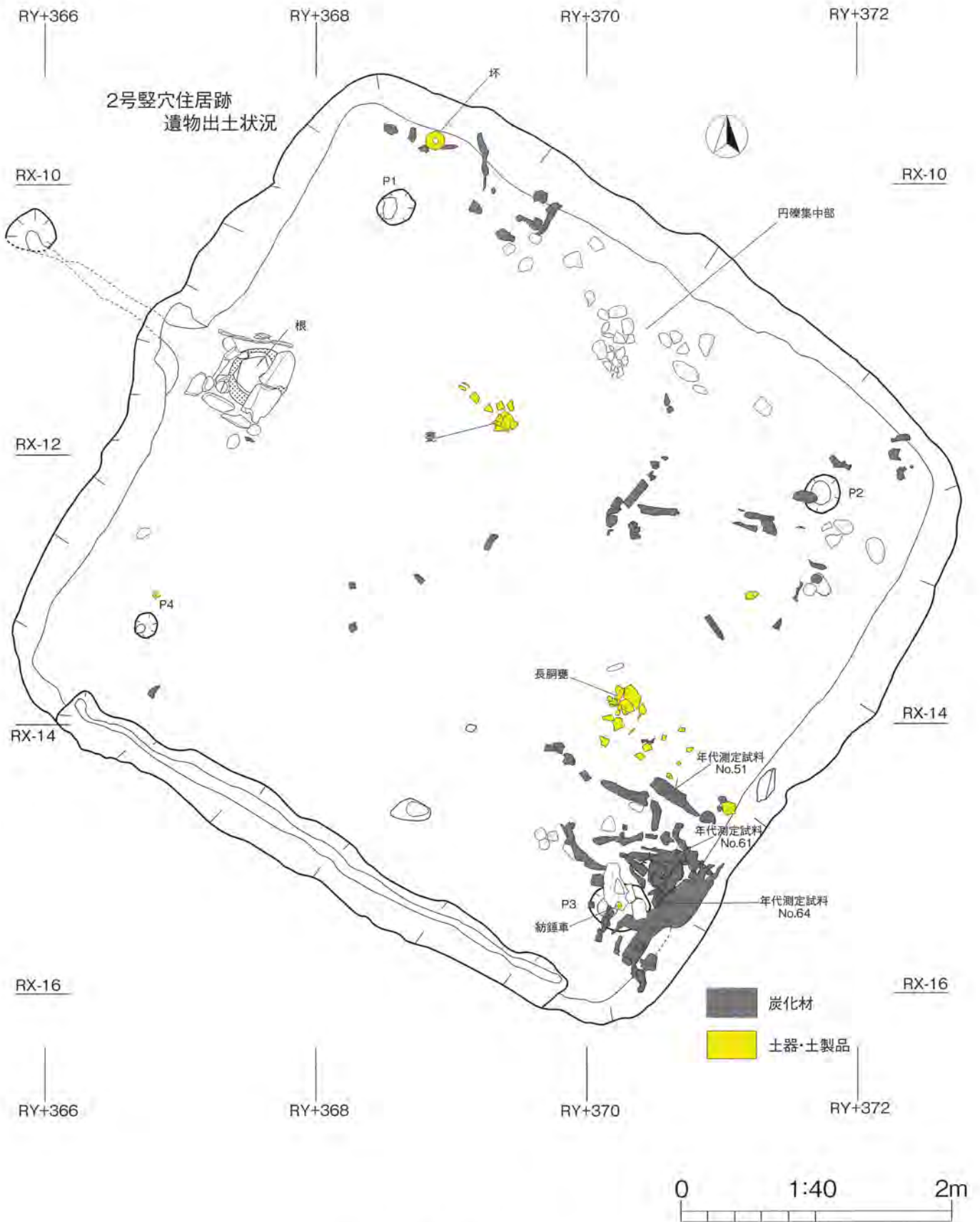




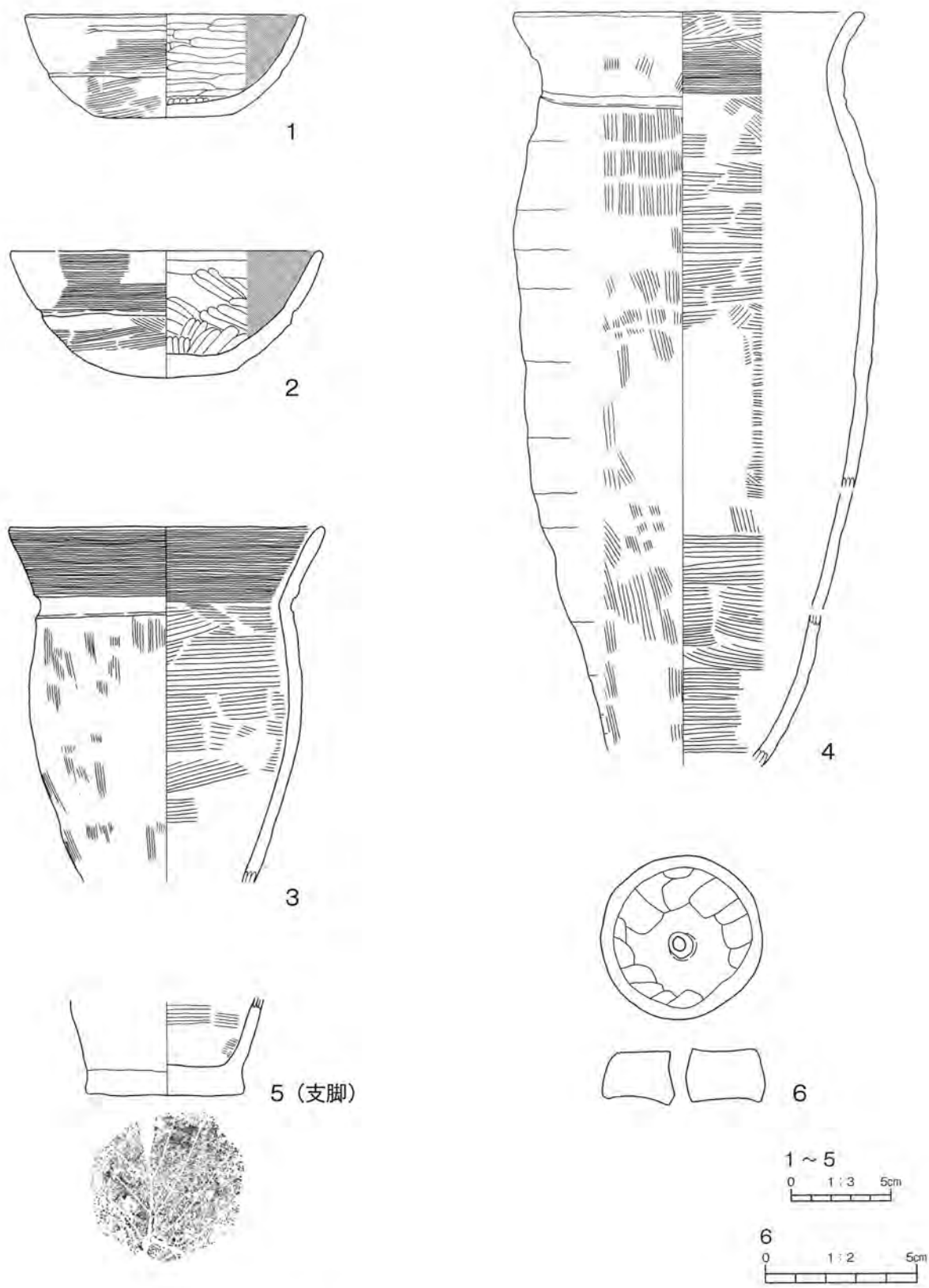
2号竪穴住居跡 カマド

層	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
a1	7.5YR4/4 s/cl	10YR6/6 s/cl 径1cm塵状2%	粘性なし・やや密・カーボン1%
a2	10YR4/3 s/cl	10YR4/4 s/cl 径2cm塵状1%	粘性なし・やや密・カーボン1%
u1	2.5YR5/6 s/cl	—————	粘性なし・密・白色砂粒
b2	10YR3/3 s/cl	—————	粘性なし・密・粘土粒
c1	10YR3/4 s/cl	10YR6/6 s/cl 径5mm粒状3%	粘性なし・密
d1	10YR4/4 s/cl	—————	粘性なし・密

第12図 2号竪穴住居跡カマド断面図



第 13 図 2号竖穴住居跡微細図



第 14 图 2 号竖穴住居跡出土遺物

## 遺構外出土遺物（第 15 図、写真 22）

出土した遺物は約 100 点を数える。遺構外出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器からなる。

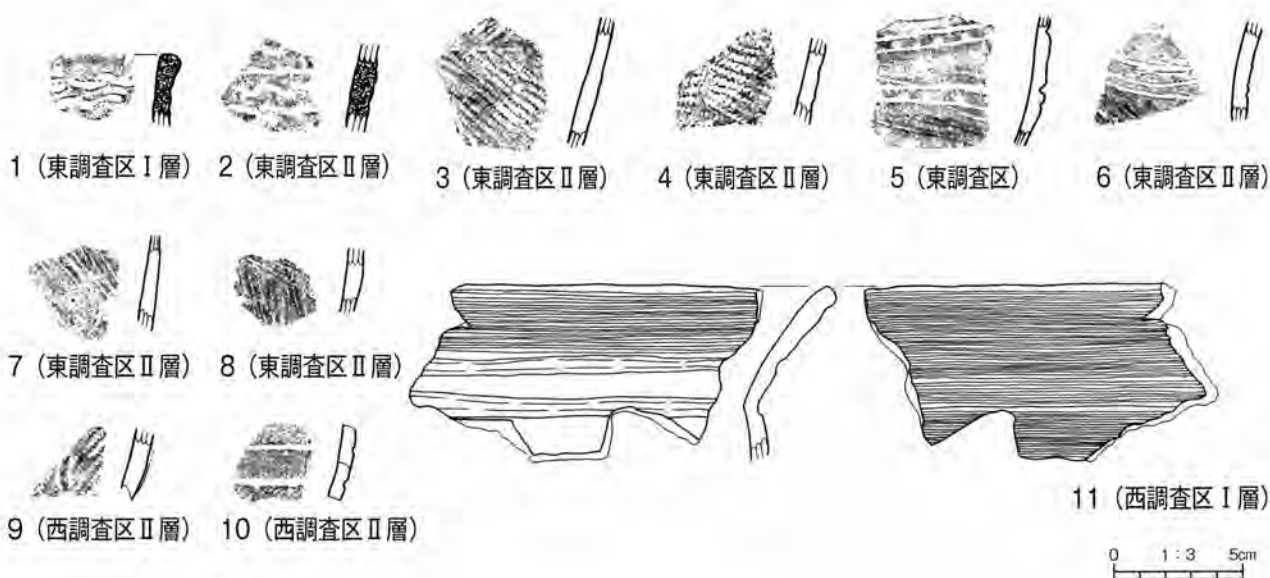
### 東調査区

1、2は縄文時代前期の大木2a式で、ともに不整撚糸文を施している。わずかに胎土に繊維を含んでいる。3、4は縄文のみで、時期が不明である。

5～8はいずれも条間の空いた撚糸文を施す赤穴式と呼ばれる弥生時代後期の土器である。5は節の細かい撚糸文を地文とし、平行沈線間に交互刺突を施している。6は節の細かい撚糸文を地文とし、曲線状の沈線を施している。7、8は節の細かい撚糸文のみを施している。8は当該期に特徴とされる斜走と縦走の撚糸文を交差させて施している。

### 西調査区

9は縄文時代中期、大木8a式もしくは8b式の縄文土器である。9はRL縄文を縦位に施文し、隆線を貼付している。10は磨消縄文が見られる小破片で、縄文時代後期もしくは弥生時代中期に属する。11は土師器の甕の口縁部である。2号竪穴住居跡から西へ2mの位置から出土した。外面は2列の段を有し、沈線より上部はヨコナデによる調整を施している。内面もヨコナデによる調整を施している。時期は8世紀と考えられる。



第 15 図 遺構外出土土器



### (3) 自然科学分析

#### 乙部Ⅱ遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

##### 1 測定対象試料

乙部Ⅱ遺跡は、岩手県宮古市田老字青砂里地内に所在する。測定対象試料は、2号竪穴住居跡から出土した炭化材3点である(表1)。

この住居跡では、床面から5～6cm上位の埋土から炭化材がまとまって出土し、焼失住居跡と考えられている。時期は奈良時代と推定される。

##### 2 測定の意義

試料が出土した竪穴住居跡の年代を明らかにする。

##### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

##### 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxⅡ)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

##### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要

がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい ( $^{14}\text{C}$ が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 ( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の $^{14}\text{C}$ 年代は、No.51が $1330 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.61が $1180 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.64が $1150 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、No.51が656 ~ 685cal ADの範囲、No.61が778 ~ 885cal ADの間に3つの範囲、No.64が779 ~ 962cal ADの間に4つの範囲で示される。奈良時代との推定に対し、No.61、64は一致する年代値を含む。No.51は、 $1\sigma$ 暦年代範囲では推定より古い、確率の低い範囲を含めて $2\sigma$ で見ると、推定に一致する範囲がある。

同じ焼失住居跡に属するNo.51が他の2点に比べて古い値となっていることについては、以下に記す古木効果による可能性がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が形成された年代を示すことから、樹皮直下の最外年輪の年代が樹木が伐採等で死んだ年代を示し、内側の年輪は最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる。今回測定された試料は、いずれも樹皮が確認されていないため、本来の最外年輪より内側が測定され、実際の年代より古い値が示されている可能性があり、試料間に見られる年代差の原因の一つとして考えられる。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-161216	No. 51	2号竪穴住居跡 (SI-2) 埋土4	炭化材	AAA	-24.98 ± 0.21	1,330 ± 20	84.70 ± 0.24
IAAA-161217	No. 61	2号竪穴住居跡 (SI-2) 埋土4	炭化材	AAA	-26.59 ± 0.20	1,180 ± 20	86.30 ± 0.24
IAAA-161218	No. 64	2号竪穴住居跡 (SI-2) 埋土4	炭化材	AAA	-25.50 ± 0.30	1,150 ± 20	86.63 ± 0.24

[#8203]

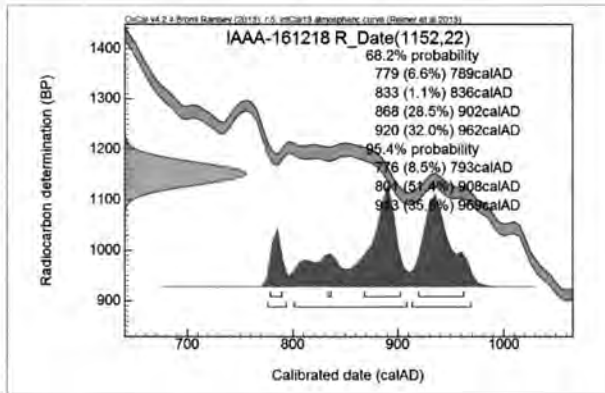
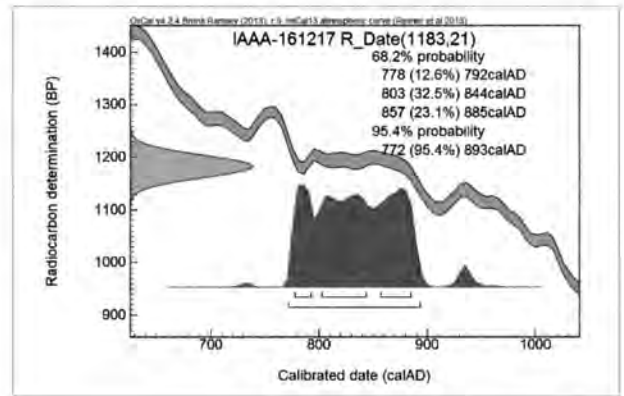
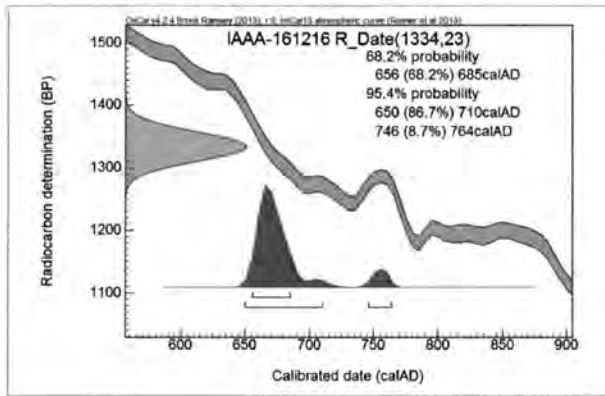
表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-161216	1,330 ± 20	84.70 ± 0.24	1,334 ± 23	656calAD - 685calAD (68.2%)	650calAD - 710calAD (86.7%) 746calAD - 764calAD ( 8.7%)
IAAA-161217	1,210 ± 20	86.02 ± 0.23	1,183 ± 21	778calAD - 792calAD (12.6%) 803calAD - 844calAD (32.5%) 857calAD - 885calAD (23.1%)	772calAD - 893calAD (95.4%)
IAAA-161218	1,160 ± 20	86.54 ± 0.24	1,152 ± 22	779calAD - 789calAD ( 6.6%) 833calAD - 836calAD ( 1.1%) 868calAD - 902calAD (28.5%) 920calAD - 962calAD (32.0%)	776calAD - 793calAD ( 8.5%) 801calAD - 908calAD (51.4%) 913calAD - 969calAD (35.5%)

[ 参考値 ]

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19(3), 355-363



[ 図版 ] 暦年較正年代グラフ ( 参考 )



## 1. 試料

乙部Ⅱ遺跡は宮古市田老字青砂里の標高 75m の尾根に位置する奈良時代の遺跡で、SI-2 竪穴住居は出土した土師器から 8 世紀頃の焼失住居とされている。炭化材は建物の南東隅に集中しているが他地点もまばらに分布している。炭化材の多くは建築材とみられることから当時の建築材における木材利用状況を解明するため、70 試料の樹種同定をおこなった。

樹種同定は炭化材試料を自然乾燥させた後、剃刀で横断面、放射断面、接線断面の 3 断面を割り、実体顕微鏡及び反射光式顕微鏡で観察・同定をおこなった。

## 2. 同定結果

同定結果を表 1 に示した。70 試料のうち破片が複数個あるものは全ての樹種を確認し、複数種の炭化材が混在していた No.12, No.13, No.55, No.56, No.67 については枝番号の a, b を付した。同定された炭化材の樹種は 5 分類群で、スギ、コナラ属コナラ節、クリ、ニレ属、ミズキであった。また No.13 試料のうち細くてやや堅い破片の 1 つはイネ科以外の草本であった。以下に同定された樹種の細胞構造学的記載をおこなう。

スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don) : 早材から晩材への移行はやや急で晩材部が比較的厚く、樹脂細胞が晩材部接線方向に並んで集中する。放射組織はすべて柔細胞からなり、分野壁孔は典型的なスギ型で 1 分野に 2 個存在する。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) : 年輪のはじめに大きな道管が 2-3 列集合し、その後径が急減して火炎状に小管孔が配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で放射組織は単列で同性である。

コナラ属コナラ節 (*Quercus* sect. *Prinus*) : 年輪のはじめに大きな道管が 1-2 列配列し、その後急に径を減じて薄壁で角張った小さな管孔が波状に配列する環孔材で、横断面で数ミリおきに広放射組織が確認される。道管の穿孔板は単一で放射組織は同性で、単列と 20-30 細胞幅の大きな広放射組織がある。

ニレ属 (*Ulmus*) : 年輪はじめに大型で丸い道管が単独で 1 列並び、晩材部では小型で薄壁の角張った管孔が多数集合して斜めないし接線方向に帯状に連なる環孔材。道管の穿孔板は単一で小道管内壁にらせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状で晩材部では小道管の周囲を囲んで帯状となる。放射組織は同性で 1-8 細胞幅で比較的滑らかな紡錘形である。

ミズキ (*Cornus controversa* Hemsl. ex Prain) : 単独ないし 3~4 個放射方向に複合した小管孔が年輪内にほぼ均一に散在する散孔材で年輪はじめでやや密度が高い。道管の穿孔板は段数が多い階段状で道管側壁は交互壁孔。放射組織は異性で 1~4 細胞幅で単列部が翼状に長い。

なお、No.68 試料は接線断面方向の幅が 5mm 程度と薄く広放射組織が確認不可能な場合があるため「クリまたはコナラ節」との同定にとどめた。

表1 乙部II遺跡SI-2住居跡出土炭化材一覧表

炭化材試料番号	樹種	炭化材試料番号	樹種	炭化材試料番号	樹種
1	コナラ節	24	コナラ節	49	コナラ節
2	コナラ節	25	コナラ節	50	コナラ節
3	コナラ節	26	コナラ節	51	コナラ節
4	コナラ節	27	コナラ節	52	コナラ節
5	コナラ節	28	コナラ節	53	コナラ節
6	コナラ節	29	コナラ節	54	コナラ節
7	コナラ節	30	コナラ節	55 a	コナラ節
8	コナラ節	31	コナラ節	55 b	ミズキ
9	コナラ節	32	コナラ節	56 a	コナラ節
10	コナラ節	33	コナラ節	56 b	クリ
11	コナラ節	34	コナラ節	57	コナラ節
12 a	コナラ節	35	コナラ節	58	ニレ属
12 b	ミズキ	36	コナラ節	59	クリ
13 a	コナラ節	37	クリ	60	コナラ節
13 b	草本	38	コナラ節	61	クリ
14	コナラ節	39	クリ	62	コナラ節
15	クリ	40	クリ	63	コナラ節
16	コナラ節	41	クリ	64	クリ
17	コナラ節	42	コナラ節	65	コナラ節
18	コナラ節	43	コナラ節	66	コナラ節
19	コナラ節	44	コナラ節	67 a	コナラ節
20	コナラ節	45	コナラ節	67 b	スギ
21	コナラ節	46	コナラ節	68	クリまたはコナラ節
22	コナラ節	47	コナラ節	床面直上 75	コナラ節
23	コナラ節	48	コナラ節	床面直上 79	コナラ節

### 3. 考察

本遺跡で出土した炭化材の樹種別個数計を表2にまとめた。最も多いのはコナラ属コナラ節の60点で同定した破片の80%と大半を占め、ついでクリが9点で12%とやや多く、他の樹種はミズキが2点、スギとニレ属が1点ずつであった。本遺跡の竪穴住居SI-2では建築材としてコナラ属コナラ節を多く用い、クリもともに利用していたと考えられる。

SI-2住居床面における炭化材樹種の出土位置を図1に示した。最も多く出土しているコナラ属コナラ節は東壁南側で多いものの北壁付近でも破片は小さいが多い。コナラ節は住居全体に分布していることから住居構築材と考えられる。クリは東壁南側で多く、住居中央と北東の小さい柱穴で出土し破片も比較的大きいものがあることから住居構築材とみられる。スギ、ミズキ、ニレ属は建築材としても用いられるが、比較的残りがよい東壁南側でも破片が小さいため主要構築材ではなく細い部材もしくは木製品の可能性も考えられる。したがって本遺跡SI-2竪穴住居の建築材はほとんどコナラ属コナラ節を利用しており厳密な樹種選択があったと考えられる。

東北地方の8-10世紀頃の住居建築材にはスギ、クリ、コナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節などが多く用いられる傾向にあり、本遺跡で出土した炭化材もこうした傾向に類似する。2011年に分析をおこなった宮古市の向沢遺跡では10世紀頃とやや時代が新しくなるが住居内炭化材でコナラ属コナラ節とクリを多く出土しており似たような傾向が見られる。また8世紀頃の一戸町上野D遺跡や田中4遺跡でもコナラ節が8～9割を占めるなどコナラ節の多用傾向がある(山田1993)。

表2 樹種別個数

樹種	計
コナラ節	60
クリ	9
ミズキ	2
クリまたはコナラ節	1
スギ	1
ニレ属	1
草本	1
同定個数	75

引用文献

山田昌久. 1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究特別第1号, 植生史研究会, 1-244.

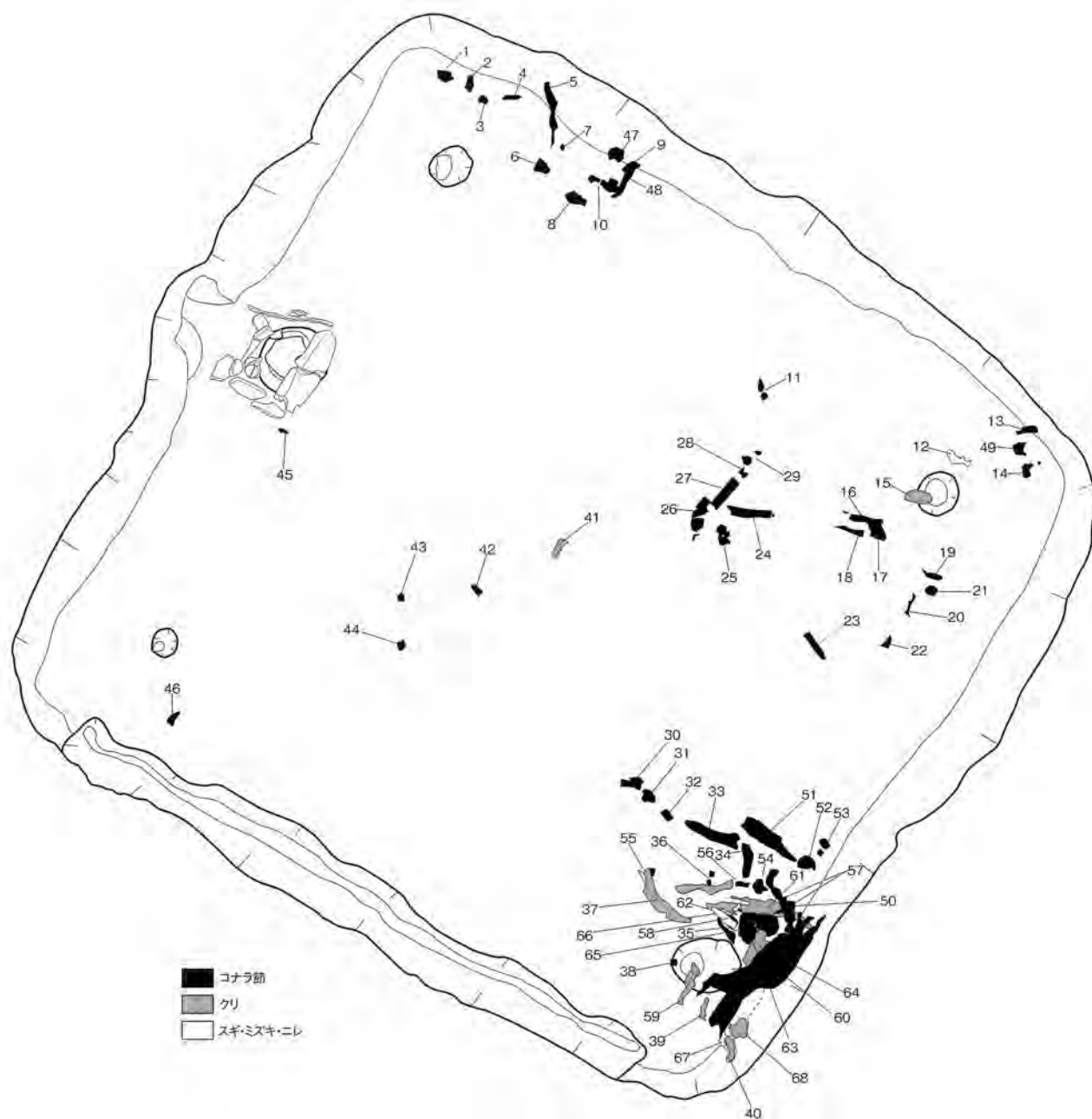
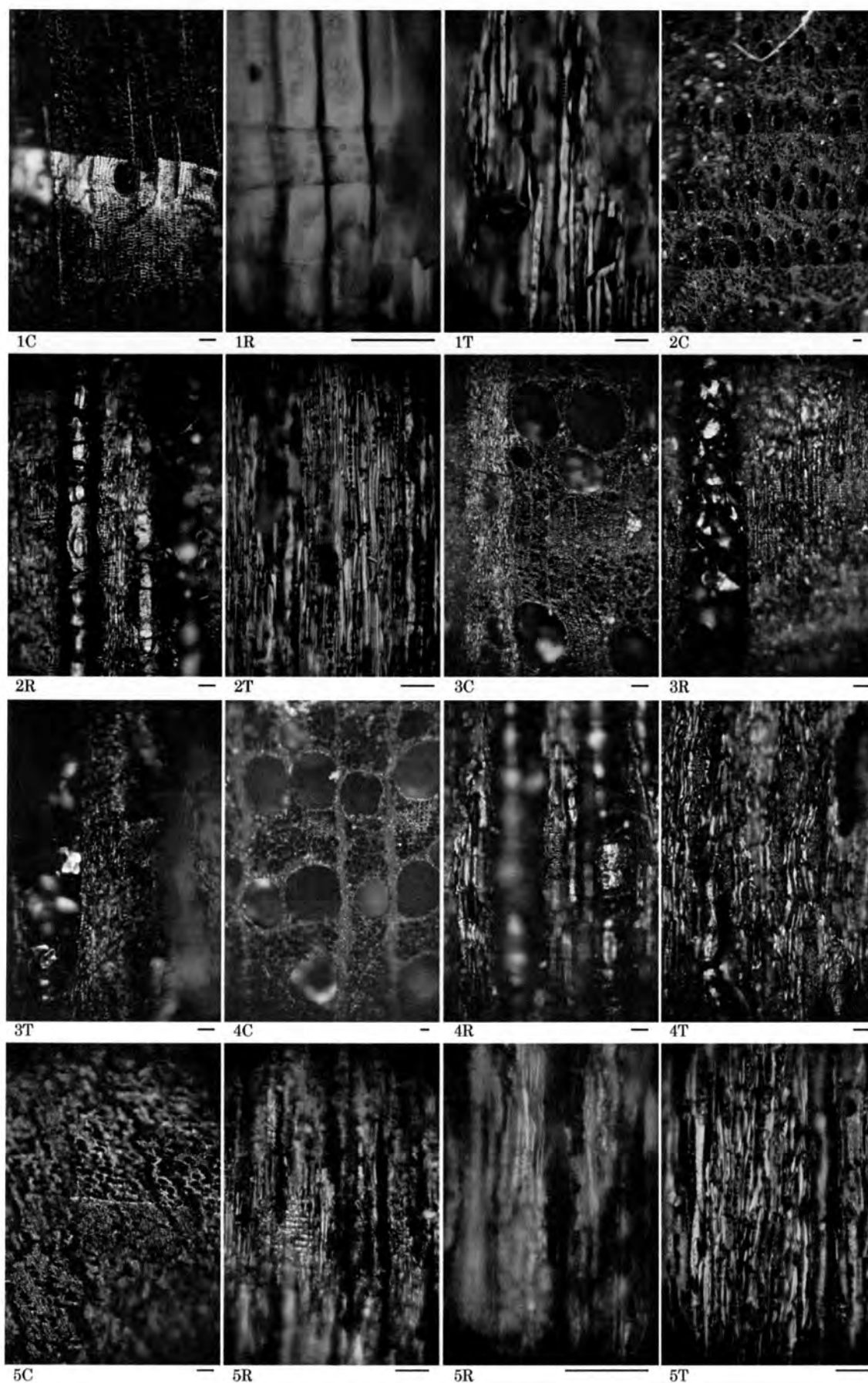


図1 乙部II遺跡 SI-2 竪穴住居跡炭化材出土位置と樹種



図版1 乙部Ⅱ遺跡 SI-2 住居出土炭化材の顕微鏡写真

1. スギ (67b) 2. クリ (15) 3. コナラ属コナラ節 (3) 4. ニレ属 (58) 5. ミズキ (12b)

C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm



#### (4) 調査のまとめ

乙部Ⅱ遺跡発掘調査では古代に属する竪穴住居跡が2棟、土坑1基を検出し、2号竪穴住居跡からは8世紀の土師器、土製品が出土した。また、遺構外からは僅かであるが、縄文土器、弥生土器、土師器が出土した。以下、遺構と遺物に分けてまとめとする。

##### ・遺構

1号竪穴住居跡は最大長が6mを測るが、南部は床が崩落したためか床面が途中で確認されなかった。北壁には被熱した礫や焼土が集中する火床を確認したためカマドと想定したが、煙道と煙出しのピットは確認されなかった。このように煙道と煙出しのピットが確認されなかった事例は少ないものの、市内では弘川館跡、赤前Ⅲ遺跡、磯鷄館山遺跡で確認されている。弘川館跡で検出されたカマドは本例のように石が散乱していることもなく袖と天井を構築した状態で検出されている。遺構内からは平安時代の土師器の甕が床面、カマド、カマドの天井石上部から出土した他、鉄製の鋸が出土している。このような事例を踏まえると、本例も住居としての性格を有していたと考えられ、石が散乱していたことは他の地へ移動する際に行われたカマドの廃絶と考えられる。

2号竪穴住居跡は狭い尾根に構築された8世紀の竪穴住居跡である。平面プランは1辺が5.5mの大略方形を呈し、西壁にカマドを構築し、4本柱で南側にのみ周溝が確認された。床面の直上層である5層からは土師器と紡錘車出土した他、炭化材が多く出土していることから、焼失住居(家屋)の様相も呈している。カマドは石組による袖と天井が残され、土師器の底部と平らな礫が支脚として出土した。8世紀の竪穴住居跡は市内では山口地区では狐崎遺跡、山口館跡、磯鷄地区では上村貝塚、松山地区では木戸井内Ⅳ遺跡、花輪地区では鱧沢遺跡、赤前地区では赤前Ⅳ遺跡、小堀内Ⅲ遺跡、津軽石地区では弘川Ⅰ遺跡、津軽石大森遺跡で確認されているが、田老地区ではこれが初めての検出例となる。市内では狭い尾根でありながらも奈良・平安時代の竪穴住居跡が連続して確認される事例が報告されているが、本例は1棟のみの検出であることから集落跡とは言い難いが、狭い尾根に住居を構える点は日当たりの良さや湿気などの面、あるいは尾根を移動手段とする面から好都合であったものと考えられる。出土した炭化材については自然科学分析を行った結果、年代測定については出土遺物との整合性がほぼ認められる結果となった。樹種同定については考察によるとコナラとクリで9割を占める結果となり、両者は竪穴住居の建築材として選択的に利用されていたと考えられる結果となった。地形的特徴から資材調達が現地によるものと考えれば、8世紀頃の当遺跡周辺はコナラとクリが一定の割合を占めた山林で、生育したコナラとクリを選んで竪穴住居を造っていたと考えられる。

##### ・遺物

2号竪穴住居跡から出土した土師器(第14図1~4)のうち1、3、4は床直の土層から出土した住居内一括の土師器である。また、2は埋土中から出土しており、1、3、4とは時間差があるものと考えられる。4点の土師器には肩の部分に段を有していることから、時期は8世紀に属するものと考えられる。器種別に比較すると、1の坏は肩の部分に段を有し、底部が平底化しているが、2の坏は肩の部分に段を有し、底部は丸底である。調整はいずれも外面は口縁部がヨコナデ、体部がハケ、内面は幅の狭いミガキである。3と4の甕については、3は肩の部分に幅の広い横位の沈線を施し、口縁部が直線的に外へ開く。4は肩の部分に段を有し、口縁部は外反している。調整は体部外面のヘラナデ、体部内面のハケが共通している。

県内における8世紀の土師器編年は伊藤博幸氏、高橋信雄氏をはじめ検討され、東北南部の土器

編年との対比を試みている。また、沿岸部においては佐藤良和氏が山田町沢田1遺跡、上村遺跡、大植町夏本遺跡出土土師器の器形、調整から変遷過程をⅠ期～Ⅲ期に分けて論じられている。本例の一括資料は坏底部の平底化、甕口縁部の外反から8世紀の後葉、ロクロが使用され肩部の無段化となる以前の所産と考えられる。第14図1の坏は段を有する丸底→段を有する平底化→無段化し平底→ロクロ使用へと変遷する過程における「段を有する平底化」した土師器の坏として好例な資料といえる。東北南部の土器編年と比較するならば、底部内面の平底、坏の小型化から高橋信雄氏編年の第Ⅱ期2群に該当し、国分寺下層併行と考えられる。埋土から出土した第14図2については底部が完全に平底化していないため、一括資料より前、8世紀の前葉から中葉の所産と考えられる。また、2号竪穴住居跡の近くで出土した第15図11の土師器甕の口縁部についても本例の一括資料以前の所産と考えられる。

遺構外出土土器には弥生時代後期、赤穴式の土器が含まれ、第15図5～8がそれに該当する。当遺跡から約5km北西に位置する岩泉町豊岡V遺跡ではこの時期の竪穴住居跡が10棟検出されている。豊岡V遺跡は標高130mの海岸段丘上の一番高い所に立地している。見晴らしの良い点で立地は似ており、竪穴住居跡が周辺にあったことが想定される。

最後に2号竪穴住居跡からは土製の紡錘車が1点出土している。紡錘車は貫通孔に棒を通し繊維に撚りかける道具である。奈良時代の紡錘車として限定すれば出土数は少なく、貴重な資料と言える。

#### ・結語

東日本大震災から6年が経過し、その間で市内では高台への住宅再建に向けた復興事業が急ピッチで行われた。当発掘調査も田老地区防災集団移転促進事業に伴う埋蔵文化財調査としてデジタル機器の導入等による調査の迅速化に努めたことで発掘調査を早期に着手・完了することが出来た。その中で奈良時代の遺構・遺物が田老地区で初めて検出されたことが発掘調査における最大の成果となった。また、遺構外からは縄文時代前期・中期、弥生時代後期の遺物が出土したことから、当遺跡が立地する尾根は縄文時代前期から生活の場として利用され、弥生時代にも生活の痕跡が残り、奈良時代には竪穴住居が造られるようになったことが分かった。

一方で当遺跡は復興事業に伴い新たに発見された遺跡の一つである。周辺にも新規の遺跡となる可能性があると考えられ、沿岸における遺跡分布の立地について再考を要すると考えられる。今後は周辺での調査により田老地区の古代の様相が明らかになることを期待したい。

#### 参考文献

宮古市教育委員会 2005 『弘川館跡』

高橋信雄 1982 「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器の対比」『北奥古代文化』13

光井文行 1987 「7・8世紀にみられる沈線文をもつ土器について」『岩手県埋蔵文化財センター紀要Ⅶ』

岩泉町教育委員会 2006 『豊岡V遺跡』

佐藤良和 1998 「岩手県沿岸部の土師器の変遷」『岩手県埋蔵文化財センター紀要ⅩⅧ』

# 写 真 图 版







写真1 調査区近景1 (南から)



写真2 調査区近景2 (西から)



写真3 1号竪穴住居跡完掘状況（南から）



写真4 1号竪穴住居跡検出状況（南から）



写真5 1号竪穴住居跡カマド完掘状況（南から）



写真6 1号土坑セクション（西から）



写真7 1号土坑完掘状況（南東から）



写真8 2号竖穴住居跡完掘状況（北東から）



写真9 2号竖穴住居跡検出状況（東から）



写真10 2号竖穴住居跡セクション（西から）



写真11 2号竖穴住居跡カマド完掘状況（南東から）



写真12 2号竖穴住居跡支脚検出状況（南から）





写真 13 2号豎穴住居跡出土土師器(1) (南から)



写真 14 2号豎穴住居跡出土土師器(2) (西から)



写真 15 2号豎穴住居跡出土土師器(3) (南から)



写真 16 2号豎穴住居跡出土紡錘車 (西から)

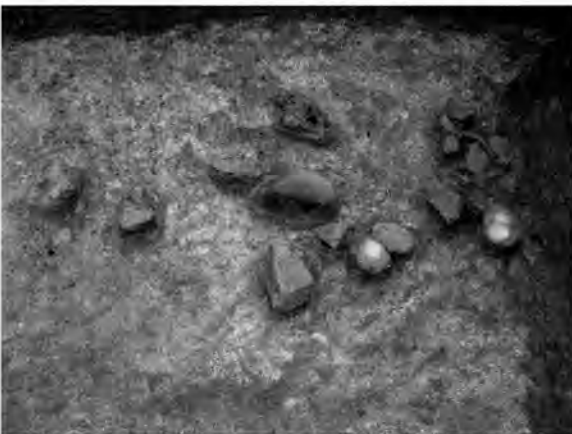


写真 17 2号豎穴住居跡出土円形礫 (南から)



写真 18 2号豎穴住居跡出土炭化材(1)



写真 19 2号豎穴住居跡出土炭化材(2)



写真 20 2号豎穴住居跡出土炭化材(3)



1



2



4



3



5



6

写真 21 2号竖穴住居跡出土遺物



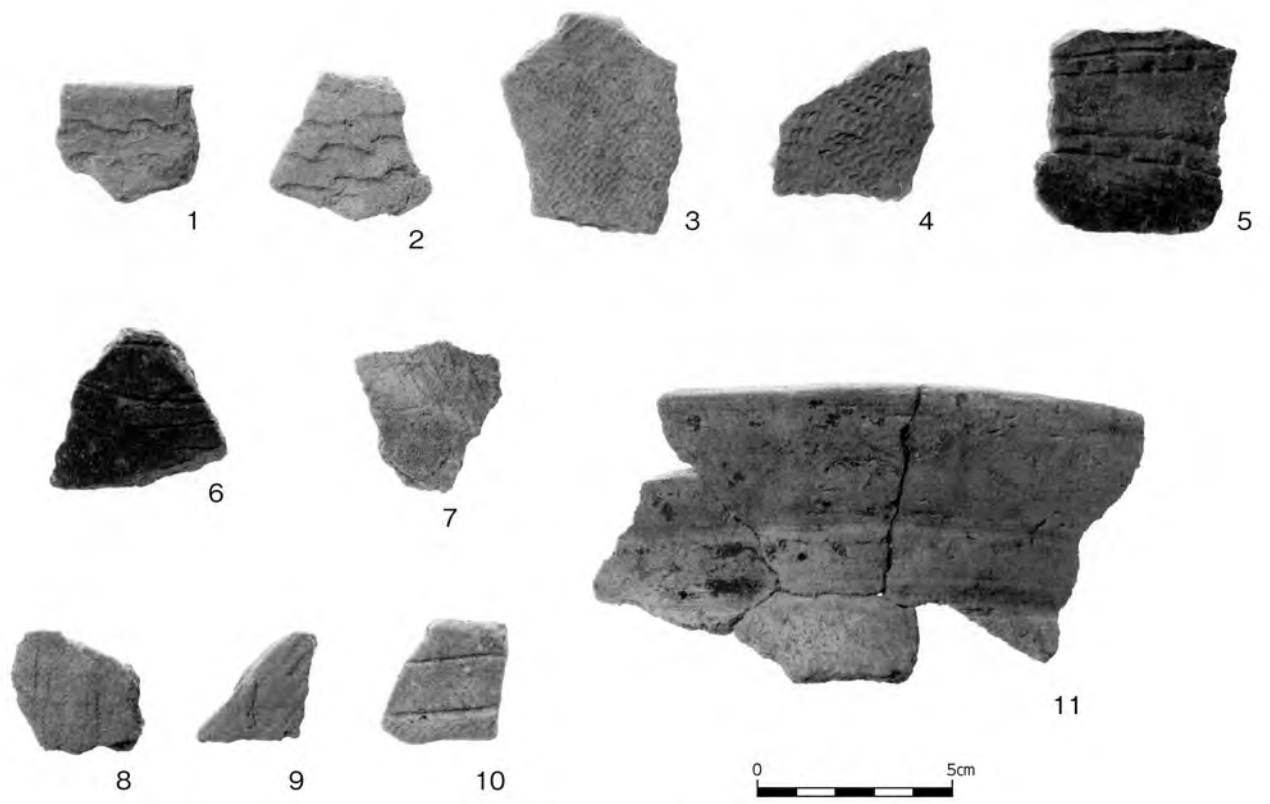


写真 22 遺構外出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	おとべ2いせき
書名	乙部Ⅱ遺跡
副書名	田老地区防災集団移転促進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	93
編著者名	江口 邦泰
編集機関	岩手県宮古市教育委員会文化課
所在地	〒027-0097 岩手県宮古市崎山第1地割16番地1
発行年月日	平成29年3月31日(2017年)

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おとべ2いせき 乙部Ⅱ遺跡	いわてけんみやこし 岩手県宮古市 あおざり 青砂里	3202	LG75-0284	39 度 44 分 31 秒	142度 58 分 53 秒	20130704～ 20130830	154㎡	田老地区防災 集団移転促進 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
乙部Ⅱ遺跡	集落跡	古代	竪穴住居跡2棟 土坑1基	縄文土器 弥生土器 土師器 土製品	古代の焼失住居が 検出された。

# 宮古市埋蔵文化財調査報告書一覽

1	1979	『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』
2	1980	『宮古市千徳遺跡発掘調査概報』
3	1983	『宮古市遺跡分布調査報告書1』
4	1984	『宮古市遺跡分布調査報告書2』
5	1984	『赤前遺跡群第1次・第2次発掘調査報告書』
6	1985	『宮古市遺跡分布調査報告書3』
7	1985	『金浜館跡発掘調査報告書』
8	1986	『宮古市遺跡分布調査報告書4』
9	1986	『宮古市遺跡分布図一昭和60年度版一』
10	1986	『中谷地・島田遺跡調査報告書』
11	1987	『崎山貝塚・トロノ木IV遺跡調査報告書』
12	1987	『寒風・早稲橋IV遺跡調査報告書』
13	1987	『崎山遺跡群I一昭和60年度発掘調査概報一』
14	1988	『青猿I・下在家II・千徳城遺跡群(堀合館)一昭和62年度発掘調査報告書一』
15	1988	『崎山遺跡群II一昭和62年度発掘調査概報一』
16	1989	『千鶴遺跡一昭和62年度発掘調査報告書一』
17	1989	『トロノ木I遺跡一第1〜7次発掘調査報告書一』
18	1989	『崎山遺跡群III一昭和63年度発掘調査概報一』
19	1989	『高根遺跡一昭和63年度発掘調査報告書一』
20	1989	『狐崎II遺跡一昭和63年度発掘調査報告書一』
21	1989	『崎山トロノ木IV遺跡一昭和63年度調査報告書一』
22	1990	『崎山遺跡一平成元年度発掘調査報告書一』
23	1990	『崎山遺跡群IV一平成元年度発掘調査概報一』
24	1990	『磯崎館山遺跡一昭和63年度発掘調査報告書一』
25	1990	『鎌ヶ崎館山貝塚一平成元年度発掘調査報告書一』
26	1991	『崎山遺跡群V一平成2年度発掘調査概報一』
27	1991	『青猿I・千徳城遺跡群一平成元年・2年度発掘調査報告書一』
28	1990	『熊野町遺跡一昭和63年度発掘調査報告書一』
29	1991	『弘川I遺跡一平成2年度発掘調査報告書一』
30	1992	『金浜I遺跡(昭和58年度)・大付遺跡(平成2年度)発掘調査報告書』
31	1992	『重茂館遺跡群一第1次調査報告書一』
32	1992	『黒森町I遺跡一平成2年度発掘調査報告書一』
33	1992	『高根遺跡一平成3年度発掘調査報告書一』
34	1992	『鯉沢遺跡一平成2年度発掘調査報告書一』
35	1992	『大付遺跡一平成3年度発掘調査報告書一』
36	1992	『細越I遺跡・芋野II遺跡一農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書一』
37	1992	『崎山遺跡群VI一平成3年度発掘調査概報一』
38	1993	『萩沢II遺跡一平成4年度発掘調査報告書一』
39	1993	『早稲橋II遺跡一第1次・第2次発掘調査報告書一』
40	1993	『崎山遺跡群VII一平成4年度発掘調査概報一』
41	1994	『崎山遺跡群VIII一平成5年度発掘調査概報一』
42	1995	『赤前I牛子沢遺跡一平成4年度発掘調査報告書一』
43	1995	『磯崎館山遺跡発掘調査報告書』
44	1995	『崎山貝塚一範囲確認調査報告書一』
45	1995	『笹沢I・加村・仲組III・界ノ神遺跡一市道浦の沢線改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書一』
46	1995	『花原市遺跡一平成4年度発掘調査報告書一』
47	1995	『宮古市内遺跡発掘調査概報I 早稲橋II遺跡・崎山貝塚』
48	1996	『大付遺跡一平成5年・6年度発掘調査報告書一』
49	1997	『花原市遺跡一平成8年度発掘調査報告書一』
50	1997	『白石遺跡一第6次発掘調査報告書一』
51	1998	『赤畑・天神山・山口館一北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書一』
52	1998	『藤畑遺跡一平成9年度発掘調査報告書一』
53	1999	『赤前III・赤前IV八枚田・赤前V柳沢・赤前VI釜屋ヶ沢・小堀内III遺跡一水産課軽石環境整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書一』
54	1999	『千鶴IV遺跡一水産課千鶴地区漁港漁村総合整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書一』
55	1999	『崎山貝塚一第12次・13次内容確認調査概報』

56	2000	『木戸井内II・木戸井内III・上村III遺跡一特別高圧送電線ラサ工業宮古支線新設工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書一』
57	2002	『山口館跡一北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書一』
58	2002	『小沢II大上遺跡一市内遺跡発掘調査報告書2一』
59	2003	『大又沢II遺跡一東北電力宮古ヘリポート移設工事関係発掘調査報告書一』
60	2003	『上根井沢I遺跡・沼里遺跡一市内遺跡発掘調査報告書3一』
61	2003	『早稲橋II遺跡第6次調査一市内遺跡発掘調査報告書4一』
62	2003	『下在家I遺跡一平成14年度発掘調査報告書一』
63	2004	『大程II遺跡・平浜遺跡一市道開伊崎線改良工事関係発掘調査報告書一』
64	2005	『弘川館跡一瑞雲寺裏庭整備関係発掘調査報告書一』
65	2006	『高浜VI地神遺跡一高浜四丁目宅地造成工事関係発掘調査報告書一』
66	2006	『崎山貝塚第20次調査・早稲橋II遺跡第7次調査一市内遺跡発掘調査報告書5一』
67	2006	『八木沢古館・八木沢中田遺跡・八木沢駒込I遺跡一市道岸ノ前ラントノ沢線道路工事関係発掘調査報告書一』
68	2006	『木戸井内IV遺跡一宮古市生活課市営火葬場整備事業関係発掘調査報告書一』
69	2006	『菅ノ沢遺跡発掘調査一市内遺跡発掘調査報告書6一』
70	2007	『山口館跡一市道北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書一』
71	2007	『近内館跡一宮古市都市計画課近内地区土地区画整理事業関係発掘調査報告書一』
72	2007	『牛沢遺跡・大付遺跡第11次調査一市内遺跡発掘調査報告書7一』
73	2007	『弘川館跡第2次調査一宗教法門瑞雲寺住宅建築工事地区発掘調査報告書一』
74	2008	『荷竹日向IV遺跡一市道向川原荷竹線道路工事関係発掘調査報告書』
75	2008	『宮古市遺跡分布調査報告書5』
76	2009	『国指定史跡崎山貝塚 第IV期内容確認調査概報(骨角器篇)』
77	2010	『宮古市遺跡分布調査報告書6』
78	2011	『宮古市遺跡分布調査報告書7』
79	2012	『重茂館遺跡群一第2次発掘調査報告書一』
80	2014	『八木沢駒込I遺跡・八木沢駒込II遺跡一市道磯崎金浜線道路改良工事関係発掘調査報告書一』
81	2014	『蜂ヶ沢I遺跡・山口駒込I遺跡・山口駒込II遺跡一市道蜂ヶ沢線道路改良工事関係発掘調査報告書一』
82	2014	『赤畑東遺跡一山口病院新棟建設工事関係発掘調査報告書一』
83	2015	『千徳城遺跡群一一条工務店建設工事関係発掘調査報告書一』
84	2015	『黒森町I遺跡一宗教法門「先天大道一貫道日本總天壇」研修施設建設工事関係発掘調査報告書一』
85	2015	『菅ノ沢遺跡・棚館I遺跡一市道長根岩船線道路改良工事関係発掘調査報告書一』
86	2016	『千徳城遺跡群一アパート建築関係埋蔵文化財発掘調査報告書一』
87	2016	『重茂館遺跡群一重茂小学校仮設グラウンド整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書一(第3次調査)』
88	2016	『重茂館遺跡群一重茂漁港地区漁業集落防災機能強化事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書一(第4次調査)』
89	2016	『重茂館遺跡群一重茂漁業協同組合重茂給油所建設関係に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一(第5次調査)』
90	2016	『下大谷地VI 大谷地I遺跡一市道下大谷地花輪線道路改良事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書一』
91	2016	『千鶴III遺跡一千鶴地区漁業集落防災機能強化事業関係発掘調査報告書一』
92	2016	『金浜館跡一市道磯崎金浜線(金浜工区)道路整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書一』



宮古市埋蔵文化財調査報告書 93

おと べ 2  
乙部Ⅱ遺跡

－田老地区防災集団移転促進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行	平成 29 年 3 月 31 日発行
発 行	岩手県宮古市教育委員会 〒 028-2101 岩手県宮古市茂市 2-112-1 TEL 0193-72-2175 FAX 0193-64-0212
編 集	岩手県宮古市教育委員会 文化課 〒 027-0097 岩手県宮古市崎山 1-16-1 TEL 0193-65-7527 FAX 0193-65-7508
印 刷	株式会社文化印刷 〒 027-0037 岩手県宮古市松山 5-13-6 TEL 0193-62-4578 FAX 0193-64-0333







